

書評

第32号

1973.12

「今日の実存主義とその変化」

書評編集委員会



ゴッホ「失題」

32号(12月号)目次

〔書評〕

カフカと現実……………植松 健郎 6

——『カフカ論』エムリッヒ著——

だがなぜ太陽がいつかは

西から昇らぬ

といえるだろうか……………市川 陽一 13

——『シーシュポスの神話』A・カミュ著——

サルトルの自由について……………中村 良夫 20

——『存在と無』を中心として——

嘔吐の周辺……………伊久美一義 28

——『嘔吐』を中心として——

サルトルとマルクス主義……………渡辺 幸博 38

——『シチュアション』を中心として——

『アウトサイダーを超えて』……………曾和 信一 48

——『アウトサイダーを超えて』Cウイルソン著——

〔映評〕

チャップリン体験……………大坪 信善 54

(わたしの研究ノートから)

戦後日本企業の特許戦略史……………堀 康三 58

概説(Ⅰ)……………堀

トウハチエフスキー事件の謎(Ⅲ)……………平井 友義 65

日中文化関係史の一面(ⅩⅣ)……………増田 涉 73

差別の空間構造(Ⅵ)……………末吉 栄三 79

羅針盤……………4

読者の声……………86

編集後記……………89

書物の案内……………84

連絡事項……………88

頭字

・総正書教文学部教授

表紙デザイン・社会学部二回生 福川文代

カット写真・『ジャコメッティ展』より

・『ゴッホの手紙』より

羅針盤

「実存主義」とその変化

一九世紀末から二〇世紀初にかけての世紀末思想と呼ばれるペシミズムは、ニヒリズムとデカダンスに流れ込み、ダダイズムやシュール・レアリスム、等々の芸術運動の根底をなしてきた。それは、機械文明の発達と社会機能の高度の分化によって単調な生活を余儀なくされた人々が懷疑の中で漠然とした不安にとらわれていたからであろう。

一般に「実存主義」と呼ばれる思想も、この個人人の不安の延長線上にあるように思われる。そしてそれを「実存」(存在)とは何か、自己とは何かを解明しようとする存在論的な面と、主体性を重視する自己規範的な面に分けるなら、ここで問題とするのは、後者の自己規範的な面

についてだ。

社会機構の中で漠然と暮らしているわれわれも、自分の生の意義を考える時、のがれることのできない死(無)を念頭におくなら、「生は無意味」だという観念とそれにもなう孤独感にとらわれることがしばしばあるが、これらの実感こそが「実存主義」の根底にある。その実感を通して自己の生きざま、ありかたを考えつめることは、自己を中心とした意識構造を創り出す。それは社会の価値とは相入れない部分(自己を無意識のうちに規制してきた倫理)やそれに従うことで自己を正当化しようとしている価値感の崩壊をもたらす。次には、自己を中心とした価値感の再

編成(もちろんそれらの観念は、常に変化するものだが)をもたらす。さらに以上のことを実現しようとする行動に移る。

しかし現実としての自己や社会は、意識の中でのようには変わりえない。行為の無力感是自己を過少評価させ、孤独感と無価値感の中で観念の袋小路に追いつめられ、現状を是認するという飛躍をもたらす。それを超えるとは「実存主義」においては、個人々の倫理は行動と密接不可分である。行動することによってさらに自己を創造しようとする立場だ。それはこの思想の帰結として当然のことなのだ。そしてその意識には、自己存在だけではなく、他人と自己、社会と自己との密接な関係がふくまれるはずだ。

本号では価値感の崩壊と生の意味を異様な形の作品をかき、徹底的に分析したF・カフカについて述べた。エムリッヒの論文「カフカ論」を通して書評してもらった。生とは不条理なものであるし、その不条理を生きたA・カミューからは「シーシュポスの神話」を書評してもらった。J・P・サルトルについては、論文「存在と無」等における自由の概念を一つ書評してもらった。自己を常に変化させていくべき存在としての彼の生き方について、小説「嘔吐」を中心として一つ書評してもらった。彼の思想にとって最も大きな問題であるマルキシズムとの肉体的変化を、「シ

チュアシオン III・VI・VII」に収録されている彼のマルキシズムに対する小論文から具体的な彼の行動について書評してもらった。「新実存主義」を提唱し、行動により重きをおくC・ウイルソンについては「アウトサイダーを超えて」を書評してもらった。

以上の著作者の名前は耳慣れているし、自我形成期にこれらの作品を読んで大きな影響を受けた人も多いだろう。これらの作品を読み返し、論じ合うのもいいのではないだろうか。また、本号にある作家の他にもキルケゴール、ニーチェ、ドストエフスキ、より哲学的にはハイデッカー、ヤスパース、マルセル等の著作も一読したいものだ。

なによりも「実存主義」思想で重要なことは、自己を創造することであり、自己を自己たしめることである。それは主体的な意志による思索と思想の構築、それとともにあり、相補う行動であるが、決して自己完結するものではない。社会の状況と切り離しえない(社会から規定される)とともに社会に働きかける必要性がある)ものだからだ。安易な連帯をおこなってはいけなく、流されてはいけなく、自らの連帯で、自らの生に責任をとらねばならない。自由な選択と働に根ざし、日常に根づいた連帯こそが、今こそ必要な時代ではないだろうか。



ゴッホ「種まき」

カフカと現実

植松 健 郎

『カフカ論』・エムリッヒ

志波一富 記
加藤真二

(I)
エムリッヒのカフカ論の書評を依頼されたときには、これをどのように扱えばいいか戸惑った。というのは、このカフカ論は膨大な研究論文であり、全作品の研究内容がまとめられたものであるだけにカフカを研究しているものにとっ

てはじめてその真価を発揮するであろうし、また評価の対象にこそなるであろうが、カフカの作品を充分に読んでいないもの

にとつては、この論文は難解であるばかりでなく、非常に読みづらい。エムリッヒは作品の内在解釈を行い、作品の言葉で作品の解釈を展開させているからである。作品の内在解釈とは、研究対象が作品そのものであり、芸術作品はただそれだけで生きており、作品こそすべてであるという立場に立ち、作品外の要素——伝記的諸要素——を可能な限り排除し、諸先入観を捨てて作品解釈を行う研究方法である。しかしかたに内在解釈といえども他の作品との、あるいは全作品との密接な接触を保っていないければ正当な解釈は不可能である。特にカフカの場合、特殊な表現世界であるだけに、その世界に習熟していなければならぬであろう。この研究方法は、シュタイガーによって確立された。しかしシュタイガーは、この研究方法の限界を新浪漫派ありにおいているらしく、自然主義以降の現代文学を研究対象にしようとしな。これは勿論古典主義の世界に住むシュタイガーの

趣味にも関係があるろう。しかし価値が崩壊した現代にあっては、歴史性を疎みがちの内在解釈では、現代文学を正當に解釈しきれない部分が出てくるからだといわざるを得ない。エムリッヒは内在解釈に意味をもたせるために、カフカの形象世界を心的状態の表現とする解釈から離れ、神学的方向・精神分析学的方向、あるいは社会学的方向からの解釈を離脱し、宇宙的なるものを、カフカの創作の基盤とした上で内在解釈を行っている。これは同時に一つの作品を全作品から、また全作品を一つの作品を通じて解釈することに他ならない。エムリッヒは、全作品に亘って細羅的に内在解釈を行いながら、カフカの三大ロマンの解釈に収斂させている。

第一章「宇宙的な生のテーマ」、第二章「アレゴリーとシンボールのかなたで」、第三章「異常な事物と動物と人間の「自己」」、第四章「客体世界の建造と拘束力ある錠」、第五章「現代の産業世界」、

第六章「裁判所としての世界」、第七章「人間の宇宙、ロマン「城」」からなっており、第一章では、エムリッヒの研究方法的発展が展開されており、カフカの初期の作品「観察」、「ある戦いの手記」の手法から、まずカフカをアルノ・ホルツと同じ自然主義者として出発する。第三・四章ではそれぞれ短編の解釈が網羅的になされ、カフカの難解な謎を解明しており、第五・六・七章では、それぞれ「アメリカ」・「訴訟」・「城」の三つのロマンの膨大な解釈がなされている。

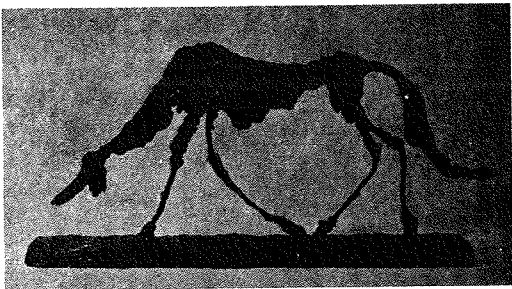
(II)

カフカは現代ドイツ文学の巨峰であり、教祖的存在であり、難解な作家である。そして多くの研究者が、カフカ研究において謎解きの危険に陥った。最近カフカがポヒューラーになり、すで

にかなり前に「訴訟」が映画化もされたが、それでも難解であるのには変りない。まるで抽象面を見るようであった。カフカの作品を知らない人のために、「観察」の中に含まれた一編をあけてみる。

「何故なら、われわれは雪の中に立つ樹の幹のようなものだ。一見それらは滑るようの上にのっているようで、ちょっと押しただけで動きそうだ。否、それはできない、何故ならそれらはしっかりと大地と結ばれているからである。がしかし、それすらも見せかけにすぎない」
原文でわずか三行の、この箴言風の商品には、カフカの観察の焦点がある。この作品をみてまず気付くことは、「何故なら」で始まっているが、その前文のなごの文章が続く。この見えない前文に、四つの文章が続き、それを展開し、説明し、解釈し、再び最初の出発点に戻る。消尽点もなく、なんの手がかりも与えず、ただ循環をくり返す。カフカは現実を、真に現実的に観察し、一般的に認識されて

父との葛藤 こういったものが、多くは伝記のない精神分析的に説明されてきた。アンデルスはいう。「ユダヤ人であるが故にキリスト教世界に所属せず、無関心なユダヤ教徒であるが故に完全にはユダヤ教徒に所属せず、ドイツ語を話すユダヤ人であるが故に完全にはポヘミアのドイツ人に所属せず、ポヘミア人であるが故に完全にはオーストリア人に所属せず、労働者保険局長であるが故に完全には官僚に所属せず、ブルジョアの子息であるが故に完全には労働者階級に所属せず、作家と自認していたが故に職場に所属せず、家族のために精力を犠牲にしたが故に作家でもない。しかし、「ぼくは家族の中で他人以上にそよそよしく暮している」といった社会的背景をもってカフカを説明しようとする。社会学的に解釈する場合には無視出来ない要素はなるが、内在解釈には不要な要素である。詩人カフカのこの孤独、



大 一九五二/五四

朝めさめると毒虫に変身しているクルーゾル・ザムザ、朝、覆過してめざめると逮捕されていたヨゼフ・K、城に呼ばれながら、城に行きつけめ測量師K、生と死の世界を永遠に往来するグラツクス……、短編から三つのロマンを含めて主人公はすべて非現実的体験をする。その体験の契機は「自らの生を確立し」『真の存在』を求める罪による。つまり世人の無意識的生活から、自らの存在を問

(III)

疎外、不安は、単なる主観的な一回限りの運命としてとらえられるものではない。むしろこの孤独は、カフカが現代と思想圏をいかなる妥協もなく突破するための条件であった。カフカはこの孤独に基づいて、彼の世紀の表象世界の限界を乗り越えて再び絶対的な現実性の形成に達したのである。

いる現実を、見せかけにすぎないとした。「徹底自然主義の厳密な観察」である。この樹木は比喩であるうか。カフカの比喩は独特で、比喩がさらに比喩を生み、本来明解にするはずの比喩がかえって対象を混濁させているようにすらみえる。大地にかたく結びついている樹木は、押せども倒れないというのが現実のほすである。しかしそれが「一見そのように見える」のであって、「押せば動くはず」である。しかしそれも「見せかけ」であって動くはずがない。「根は、しっかりと大地におりている」からである。しかしこれも「見せかけ」にすぎない。この文は、「見せかけ」という語によって連なり、循環を無限にくり返す。これは一人のクレタ人が、「クレタ人はすべて嘘つきだ」というのと全く同じである。もしこれが事実であれば、これを語ったものも嘘つきであり、「クレタ人はすべて嘘をつかない」ということになり、嘘をつかないとなれば、これを語った男も真

実を語ったことになり、「すべてのクレタ人が嘘つきだ」という最初の文にもどって来ると、この閉鎖され、出口のない循環の中に、人間と樹との関係を意義づける決定的なものは何も見出せない。われわれはこれを人間の比喩だと考える必要もない。また「訴訟」の中の挿話で、ヨゼフ・Kに僧侶が比喩として話す「控の前で」というのがある。田舎の男が控を求めて門の前まで来たが、門番から入場許可を得るまで待つ。男はついに視力も失い、控の門から差し出す一条の光を認めつつ門前で死ぬ。男は息をひきとる寸前、門番から、この門は自分自身のためにのみ開かれていたことを教えられる、という短いのだが、これもカフカの世界を知るのに重要な一編である。この挿話にしろ「訴訟」にしろ、それが日常的、経験的現象でないが故に、読者、あるいは解釈者はその謎解きに陥るのである。エムリッヒはそれを強く戒める。作品が秘

密の比喩であり、あるいは寓話であると見做し、ただただそれを解く鍵を求めようとするからである。しかしカフカの寓話的なものは、厳密な意味での寓話ではない。即ち本来寓話的、比喩的叙述は、特定の意味ないし概念を示すが、カフカの場合はそれがなく、「控」も「訴訟」も矛盾だらけのままで何ひとつ明らかにされないからである。

カフカ文学の主人公は共通して破壊する。それも自らの存在を認識し、真の生を求めようと意識した瞬間に破壊が始まる。それが罪となつて「犬のように殺される」か、「毒虫」になつて疎外されるか、あるいは大地を失つて「空中をただよふ」ことになるか、あるいは「急流の谷底に落ちる」……、あるいは主人公の前にあるものだけが、まるで雪片のように宙に舞い、あるいは招かれた城にだけに行きつけない……。

主人公の疎外と孤独と絶望、個と一般者、個人と共同体の断絶、天職と職業、

正そうとした瞬間に委身し、逮捕されて
いることを認識するのである。まだ意識
せざる世人は、自らの生活基盤が崩壊し
ていることを意識していないが故に、一
見確固たる大地の上を闊歩する。

主人公は真の生を求め、Existenzを
求める。カフカの箴言集に、「ドイツ語
の *Wahrheit* には二つの意味がある。Distanz
と *Innerlichkeit* である」というのがある。
カフカの求めた真の存在というのは、後
者の方であった。即ち「あるものへの所
属存在」である。これへの道程は「目的
地はあるが道がない」という箴言通り、
永遠に行きつづけるものでない。詩人であ
るカフカは、ハイデッガーのように存在
自体を言語的に規定したり、直接に表現
しようと試みることはない。カフカはこ
の表現し得ない隠された「真の存在」を、
詩的に、異様な、合理的対象界を突破す
る諸形象を用いて表現した。エムリッヒ
は「思惟と存在、カフカとハイデッガー」
の項で、両者の相違を述べながらも、解

釈においてハイデッガーの現代の基礎存
在論と重なっていく。所詮カフカは存在
論的にしかとらえられないのである。

カフカの主人公は、この到達し得ない
Innerlichkeit に向って闘う。この闘いは
見せかけの大地喪失と疎外からはじまる。
世界に戻ること出来ないし、相互間に
理解し合う言葉もない。

カフカの世界は経験不可能の現象界で
ある。これを経験的に限定できる現象に
還元して解明しようとして神学的に、あ
るいは精神分析的、社会学的に試みられ
てきたが、エムリッヒはそれをも包含す
る宇宙的視野でとらえようとした。経験
可能でないものを、また既成概念で表現
できないものを描いたカフカの世界は、
それでなければとらえられないからであ
る。エムリッヒは、主人公の世界と現実
の世人の世界、この二つの世界を「猟師
グラックス」を手がかりに説明する。一
五〇〇年この方、古ばけた解に乗って生

と死の世界の間をさまよっているグラッ
クスは、「一切を知る」ものであり、彼
の遍歴の歴史こそ「もつとも普遍的な一
般者、宇宙的一般者を代表」しているに
拘らず、人間世界を動かしているものを
知らず、此岸のものとの理解もない。グ
ラックスは相互理解なき二つの世界の間
をさまよふ。グラックスは「生と死の世
界の秩序から脱落し、宇宙的に遍在し、
同時にどこにも固定化」され得ないので
ある。「彼の現存在にとっては、明確に
規定できるものもはや存在しない」。
かつてすべてものが従っていた秩序は
虚像であったのだ。生の世界においても、
死の世界においても。グラックスはいず
れの世界からも閉め出されてしまった。

カフカは、一般者として認識されてい
たものが仮象にすぎないという事実を不
断の努力でもって証そうとした。雪の中
に立つ樹木もその一例である。カフカは
仮象を究ぐることによって非現実的世界を
描くことになった。「真に現実的なもの

は非現実的である」とカフカはヤノノホ
に語った。彼は非日常的、非現実的状況
を描くことによって、人間が日常的、現
実的だと思っていたことが、いかに非日常
的で非現実的であるかを示したのである。
「ある闘いの手記」には「生きること
の不可能さの証明」がある。これは虚像
的、所与の秩序の中で生き得ないことの
記録である。主人公はすべてのものを虚
像としてしか認識できなかった。主人公
像としては、二人の婦人が交わすもつと
も日常的な挨拶の言葉すら理解の外にあ
った。しかも二人の間でそれがならんら問
題もなく理解しあっているように見える
のが不可解なのである。

(IV)

またカフカは経験不可能な異様な物体
を描いた。それは人間が事物を、人間が
望む姿で眺めているからである。事物は



立方体 1934

人間に観察されることによって本来の姿
を失う。命名されたときにすでに本来の
姿を失ったのである。人間の直観と思考
によって事物はネガティブな意味におい
て変化する。「ブルームフェルト」の二
つのボールも「オドラデーク」も説明不
能、経験不可能な存在者である。エムリ
ッヒはこれらを、「事物と意義、物質と

精神、記号と意味との緊張をこえた宇宙
的なもの」としてとらえる。これは人間
が、直観と思考によって、「存在者の十
全な現実性を図式化し、局限し、破損」
したためである。まさにオドラデークは
それに対する存在者の反逆である。カフ
カの文字は、人間の直観によって、一切
の現象に虚偽の装いが施されていること

の告発である。エムリッヒはこれらの物体を、「アレゴリー、あるいはシンボル」としてでなく、また特定の局限された経験の魂の層や意識の層をあらわすものではなく、それらの層の外部に横たわった異った世界」に属するものとしている。この点こそよく謎解きに陥るところである。エムリッヒにとっては、「開示的な秘密」としてカフカの形象世界の芸術性を明らかにしようとした。

カフカの文学はまた罪の文学でもある。グレゴール・ザムザが変身した理由も、ヨーゼフ・Kが逮捕された理由も明らかでない。日常的な罪は考えられないことである。もし罪があるとすれば、それは真の生を求め、偽りの生に対してなされた批判であった。あるいはKのように、「自分が無実だ」と思っていることがKの罪である。また「アメリカ」のロスマンが社会のシステムに入れないのは彼の無罪過性であり、善良さであり、正

義感であった。

カフカは、彼の時代において、「人間の救いを問題にした」のであるが、その救いなき「時代のマイナスのみを濃厚に吸収し、それをプラスへと偽造することをしなかつた。彼は欠如した大地・空気・命令を現代に供給することに自分の任務をみた。その役目を果たすが、この世界の不条理、虚偽、野蛮な合理化、矛盾を描写する行為」であった。カフカの世界では、善良なだけの人間はその善良さ故に断罪される。しかしそれは「真の存在」を求めたものの破壊であり、世人の世界からの離脱者の没落である。深淵にかかつた橋が、自分の背中に乗せて運ぶ旅人はいったいどのような人間かを見ようとし、知ろうとして、身をよじつた瞬間に奈落に墜落した。「思考する人間は、その思考の力によって現存在の様々な二律背反をしのぎうるが、それが宇宙的展望を獲得しようとした瞬間に破壊する」。

エムリッヒはカフカの世界を「歴史的、時代的に制約された諸現象をあらわすアレゴリー、あるいは象徴としてとらえず、常に人間全体の諸現実を代表するもの」として、作品の内から、存在論的に解釈した。

カフカの世界は、それが謎めいた表象の世界であるが故に、様々な解釈の可能性を残している。エムリッヒはこの膨大にして精緻なカフカ論を通じて、すでにカフカの世界がもつ現代文明への激しい批判を顕現させ、エムリッヒの現代文明批判をカフカの作品に語らせているともいえよう。

(評者は文学部・助教役
うえまつ けんろう)

△冬樹社 一、六〇〇円
Ⅱ一、四〇〇円

だが、なぜ太陽が

いつかは西から昇らぬ

といえるだろうか？

市川陽一

「シーシュポスの神話」
A・カミュ 著
編 朔明 藤正 佐高 島正

(I)

「神々がシーシュポスに課した刑罰は、休みなく岩をころがして、ある山の頂まで運びあげるといふものであったが、ひとたび山頂にまで達すると、岩はそれ自体の重さでいつもころがり落ちてしまつてであった。無益で希望のない労働ほど

恐しい懲罰はないと……人間が自分の生へとふり向くこの微妙な瞬間に、シーシュポスは、自分の岩のほうへと戻りながら、あの相互につながりのない一連の行動が、彼自身の運命となるのを、かれによつて創り出され、かれの記憶のまなざしのもとにひとつに結びつき、やがてはかれの死によつて封印されるであろう運

命と変わるのを凝視しているのだ。……」
(シーシュポスの神話)
当然の事であるが、ひとつの作品はその時代的背景を荷って、その時代的狀況に結びついている。言葉で表現され、社会的実践に関わる思想の場合に特に顕著であり、カミュのような作家はこの時代的狀況に無視し得ないものがあり、その

なかにてを結実した意味を持ち得るのだと思われ。

カミュは書いている。

「創造はまた、人間の唯一の尊厳——すなわち、自己のあり方に対して執拗な反抗を試み、努力が不毛なのだと解つていながら、なお辛抱よく努力をつづけるという姿勢——の驚くべき証言である」(『シーシュポスの神話』)

書くこと、自分に関わる事柄だけを黙考し書き留める事に生きる情態を奪われていったキルケゴールやカフカのように、内容こそ違ひ(≠ないもの)のためでもなく、ただ反復し、足踏みをする」という姿勢のなかに私達はカミュを探さねばならぬのだと思う。そして、キルケゴールの中心的命題である「反復」という言葉を、はからずもカミュの作品に見出すところに「反復」の重みを知るのだ。

第二次大戦前後——私達が想像し得るのは、アルジェリア放逐、「異邦人」の原稿を携えて逃げ回るバリの日々、大戦

想の本質的なものであって体制が固定する程ますますクロースアップされるだろう、というものだったと思う。時期も時期だったし、私がかみ

ユに馴じていた事や当時の学園紛争のなかに「太陽の讃歌」や、「反抗の論理」などが高校生たちにまで拡がっていた事を知っていたから、なおさらその新聞評論を注目したのだと思うけれども、私はカミュを政治的次元で捕える事にある種の疑問を感じている。勿論、彼の数々の政治的行動を否定したり不当に歪曲したりする積り

は毛頭なく、政治的次元においての問題としてである。それは確かに、吉本隆明の八どんな前衛作家も政治的大衆であり、



支柱上の男の顔 1957

どんな政治家も文学的大衆なのであり：(『V(模写と鏡)』)という言葉に導かれたものである。政治が個人を客体化し

八集合Vのなかに内容を見い出すとするなら、政治的次元とは客観的状況のなかに個人の世界観を押し込める。吉本のい

〇年を境としてデビューした大江健三郎の時とは全く異質の分裂症状である。大江が自ら「私をカミュ的であると評する人もあるが、私は私自身だ……」という自負とは裏はらに、その初期の作品にわずかに不条理の臭いを嗅ぐにしても、大江の作品を貫く情念は全く日本のなものであり日本の大根芝居に過ぎない。大江の「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」を評して、かつて奥野健男が云った言葉——大江にはかかなりの権力に対するコンプレックスがあるのではない——ほど印的的なものはない。

また、もう数年も前になるが、ある新聞に「カミュの復讐」という評論が載った事がある。内容は正確には思い出せないが、たしかチェコ動乱の時期を受けて、連軍の進駐を許容した国内体制派に対して自由を求めたチェコ国民の一連の蜂起ぶりに痛く感動した調子で語り、サルトルとも比較しながら、八どのどうする事もできぬ人間の欲求Vこそカミュの思

う共同幻想論の基本的なものがここにありと私は思う。私が政治にむかふ事と政治が私を捕える事は別の問題である。そして、この事はカミュのすべりに関わりを持つものである。戦後一貫して政治的狀況に私達は疑いようもない事であるが。

(II)

カミュの不条理とは、難しいものではない。

八幻と光を突然奪われた宇宙のなかで、人間

は自分を異邦人と感じ

るV八精神が生きてゆくのに必要な限りを精神から奪ってしまったこの見定めがたい感覚Vこれが不条理の実感なのであり、

それ自体としては人間の理性を超えている世界、この世界に対する明晰を求める死物狂いの願望を持つ人間とこの両者の相対峙した状態こそ不条理だというのである。言い直せば、世界と人間とこの両者を結ぶ唯一の絆こそ不条理であると言つ。つまり、世界から分析させられた意識が、再び世界へ戻ろうとする時の異質感を指すもので、存在の孤立した現実をいかに認識すべきなのか？これがカミュの問いである。「異邦人」二部の牢獄のなかのムルソーの呼び——灰色の壁に囲まれているのは疑いようもない事実として迫ってくるのだ。

「シーシュポスの神話」はこの不条理の壁をいかに克服するかという事のみで埋められており、ひとつひとつ確かめながら進む調子はカミュの態度をよく示している。

「思考がこの砂漠のなかにすくなくとも足を踏み入れてしまったという事を、すでに僕は知っている。思考はそこに生

きる為のパンを見出した。思考はこの砂漠に入って、それまでは自分は幻影を食べて生きていたのだと悟った……」この言葉は不条理に対するかれの心構えを覗かせる。カミュは、ニーチェ、キルケゴールなどの作家に触れながら不条理の輪郭をたどり、かれらが不条理の世界をどのように脱け出してゆくかを追求する。そして、かれらが神や希望を再び獲得する事がカミュにとっては八幻影へと戻る誘惑であるかぎり、それは飛躍であり精神的死にすぎない。この誘惑の存在こそ、不条理の世界の絶えざる願望を示すものだ。

カミュの結論は、冒頭に掲げたシーシュポスのイメージに極めて印象的に語られるのである。あらゆる幻影を斥け明確へ意識の態度を持続する事によって、確実なもの(カミュにとって、身体がこの世界に存在するという事は基本的な前提であり、彼特有の地中海的太陽の願望と深くつながっている、と思われる)のな

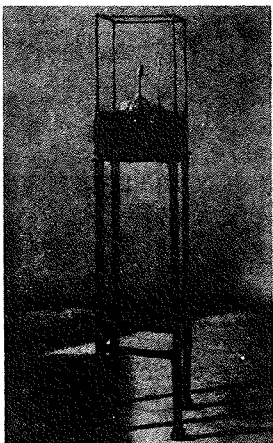
かに止まること、その不安定のうちにも絶えざる形而上の反抗を繰り返すところに生れ自己の意味を見出すこととするのである。それは希望ではなく、希望が空しい事を知りつつ生き続ける事である。こうしたカミュの態度は具体的には次のような形で進むことになる。

「確実な知識に基いて、憎悪と暴力とはそれ自体空しいものである事を知っている場合、拷問と死にむかって進む事は大変な事である。戦争を軽蔑しながら戦うこと、幸福への嗜好を保ちながら戦うことを失う事に同意すること、最高の文明についての観念を抱きながら破壊に赴くことは大変な事である」(ドイツ人への手紙)

絶望しているものに情熱を傾けること、こうした生き方に私達は馴じていない。いや、価値のないものに価値を付加すること、その両者をどちらも意識し続ける事が不可能にさえ思われてくる。到着順位が解っているには、ずれ馬券を買った

けてしかも競走馬の出走の瞬間瞬間に緊張した興奮を感じ得るだろうか？ 私はかなり前からこの疑問を抱いていた。シーシュポスは何故岩の上に覆ころんで山の彼方を見上げないのだろうか。ふもとに転がっては押しほり転が

つては押しほり、あの反響の情熱は一体何物なのだろうか？そして、決まっと思ひ浮かべるのはカミュの次の言葉である。「身体はぼくの唯一の確実性である」この言葉に出会うとき、私は不思議とある芸術作品のように、絶望と情熱という相反するイメージがカミュのなかで統合されるのを感じるのだ。つまり、身体はぼくの唯一の確実性だ、という言葉が全体を支えているという風いだ。



権 1950

(III)

私は思うのだ。カミュの世界はひとつの八出口なしの状況である。不条理の壁がある、個人の死にせよ、政治的状况

いが、安部公房が壁を透かしてみせたのは貴重な事だと思ふ。それででありながら、この混沌としたものを解こうとしないう、まるでそれが消えていくのを恐れるように。「異邦人」の結末とサルトルの「壁」の八わたしVの高笑いの感覚はかなり異質のものがあるだろう。

私はこんな戯面を書いてみた。洞窟が死んでその奥でムルソーが必死で穴を掘っている。かれはどんだん土をかきわけるがその仕事が終わって無用の事かを知っている。つまり幾らその奥をほっても何も無い事、

にせよ。このなかを「異邦人」のムルソーは動き回りが決して壁を覗こうとしない、唯、何か訳のわからぬ壁を意識させられているだけだ。(何もしゃる・アリズムのなものを言っているのではな

からだ。出口はかれの背後にあり、かれはそれを心の奥では感ずいているが決してふり返ろうとはしないのだ。今の時代は汚ない土を掘らねばならないと思ひ込んでいるから。それでも仕事は止めよう

とはしない、無用な事をしてしている自分をじっと見ている身体がある事を知っているから、その身体の中は、入口から差し込んだ光が浸透しているのだ。だからこそ、「なにひとつ可能ではなくしかもすべてが与えられている宇宙、それを過ぎた先は崩壊と虚無に他ならぬような宇宙を垣間見る」という言葉を生まれ、「死刑囚の、あの神のような自由行動可能性、生の純粋な焔以外のいっさいのものに対する、あの信じがたい無関心」という無意味なイメージが結びつくのである。このイメージがカミュの不条理の内容なのであり、かれにとって確かなものとして受け入れられ自分の運命を掌中するという自信とはうらはらに孤立したイメージの世界へ陥っていく。

形而上的反抗とは、出口なしの状況をぐるぐる回る空転の連続でありながら、死観念のなかで閉鎖的世界を形成してしまつたのだ。そして、それを支えてやまない、あの絶えざる情熱とは、「身体はほ

の自由が果たしてどれほど現実的であるかという事だ。大衆という概念は、現代の様々な組織化された社会構造のなかで、個々ばらばらな意識を与え続けられていく人間の抽象化されたものであり、社会全体と関わり合いを持つという一般的なものではなく、私達の現実には様々な下位集団と結びつけられて、逸してもなければ身動きできない、という状況であるように思う。それは抽象化し言語化するには余りに重々しく人間におおいかぶさってくるもので、「自由になるためにたかう自由な選択以外のなにものでもない」というサルトルの言葉を言葉として理解し得ても、この自由を何々には余りに私達の意識のもろさを感じざるを得ないのである。サルトルが自由人と称する「知識人階級」を創り上げたのとは別に、私達はどうして奴隷状態から脱け出す事ができるのだろうか？

この唯一の確実性であるVというカミュ独自の現実との関わり合いです。もしかれがその肉に刻まれたアルジュリアの風土の貯えを思い起こすことがなかったなら、不条理の反抗は別の形式へ移つていったであらう。サルトルの言葉を借りるなら、不条理とは「反対射・反対されるもの」としての意識の即目・対目の関係のなかにあるものである。即目を求めてやまぬ対目の無化作用としての自由な企てこそ自由の意味だとしたサルトル、それは唯あるものであるとして、即目存在のあの囁吐を脱け出した事を考えればシーシュポスの仕事はそれが全く無用な事であるというカミュの認識によって意味を持ち得るものだ。人生の無用性と一方では明晰への努力、この相互する二つの認識が、カミュを支える「身体は僕の唯一の確実性である」Vという言葉によって統合された世界を築くほど、シーシュポスのイメージの解明になる程、カミュの世界は自閉症的傾向をたどらざるを得

ない。それはカミュがあれほど恐れた、「八飛羅」の別のあるに過ぎない。その事が後で出版された「反抗の人間」の八飛羅反抗す、ゆえにわれわれVという命題へつながっていくのであるが、サルトルが「カミュに答える」のなかで、「ムルソーはどこへ行ったのか？」（佐藤朝朗）と指摘したのは違つて「反抗の人間」の命題はシーシュポスの当然の帰結なのであり、サルトルの歴史に加わるべき自由な選択の必要性であるVと、「身体は僕の唯一の確実性である」としたカミュの現実への関わり方のなかに含まれていたと考えた方がよいだろう。この自閉症的観念こそカミュの世界であり、最後の短編集となつた「追放と王国」へ帰らざるを得なかつたものである。

(IV)

最後に書いておきたい事は、サルトル

特質が形而上的無の世界と結び付くかぎり実存の意味を理解できなくなるのではなからうか、という事について書きたかったその小文を情けない思い、立腹しながらカミュについてモノ申すものは何者なのかと疑いたくなるほどである。見当違いの所もあると思うけれど、小生大学に入る前に読み終したカミュの作品の記憶を頼りに書かねばならなかつた訳であるのでお許し願うまでである。

（評者は社会学部四回生
いちかわ よういち）

「新潮社・カミュ全集II 八五〇円V

決別した後のカミュの言葉——ばくは、参

サルトルの自由について

中村良夫

——『存在と無』を中心として——

序

「人間が存在する」ということと「人間は自由である」ということの間には、何の差異もないとするサルトルの言葉は哲学者ならずとも興味をひく言葉である。人間の存在の問題と人間の自由の問題は、哲学史においても重要な問題であり、ま

た、すべての人間が心に抱く問題ではなからうか。サルトルにいたるまで、「人間の自由」は神（絶対者、完全な存在）の觀念、あるいは人間の精神との関係のもとに論じられてきた。しかし、サルトルはそのような形而上学的あるいは認識論的立場を越えて、認識に先立って存在する、いわ

ゆる反省以前の意識の地平に自由を見たのである。そしてサルトルの実存主義は「人間にあって存在は本質に先立つ」というのはこのことである。人間はあらかじめ、あるべき自己の姿を担ってこの世に生まれるなどということとはあり得ない。人間は先ず存在し、そして自己を造るのである。それはもち

ろんサルトルが神を否定するということにもついているが、しかし神が存在しないということは、ただちにわれわれが「自由の刑に処せられている」ということを意味する。

このサルトルの「人間の自由」について、私の理解を得る限りにおいて論じてみた。

〔I〕

サルトルは存在について探求していくうえで、まず二つの存在領域を考えた。

一つは即自存在であり、他方は対自存在である。一見、これらは完全に切り離された二つの存在領域なのであるが、実際

には、この分離は方法的に行なわれたのであって、彼の目的は、まさにこの二つの存在領域の関係にある。いうなれば、主客の相関関係、つまりその総合的全体である「世界―内―存在」のあり方を解明しようとしたのである。

題としている。この純粹意識はデカルトの実体我のようなものではなく、純粹な体験の流れであった。この意識においてフッサールは、その働き、いわゆる志向的意識、すなわち何ものかについての意識を主題とするのであるが、サルトルの「対自存在」は、もちろんこのような機能をもった非措定的意識を意味した。

一方、「何ものかについての意識」といわれる場合の「何もの」とは、どのように定義されるだろうか。「何もの」は明らかに意識ではない。「何もの」は意識にとって超越的な存在である。この存在をサルトルは「即自存在」とした。即自存在は「即自存在」は意識によってしか捉えられないのであるが、しかし意識からは絶対的に切り離された存在



歩く男 1947

である。従って、「即自存在」は「それ自体においてある」としか言いようがない。サルトルはこの「即自存在」を「それがあるところのものであり、それがあらぬところのものであらぬ存在」と規定している。

さて、意識は「何ものかについての意識」である以上、存在につきまとい、存在の限界内でしか出現することができない。それでいて、意識は存在を捉えるものとして、存在とは別のものとしてあるのである。意識はあるのであるが、しかしそれは、存在ではあらぬものとしてあるのであり、このことをサルトルは「それがあるところのものであらぬ、それがあらぬところのものである」といいあらわしている。

この「対自存在」と「即自存在」の關係を考えるならば、そこに絶対的な裂け目があることを認めなければならない。しかし、この裂け目は何かと問われれば、まさに何ものでもないものとしかいいよ

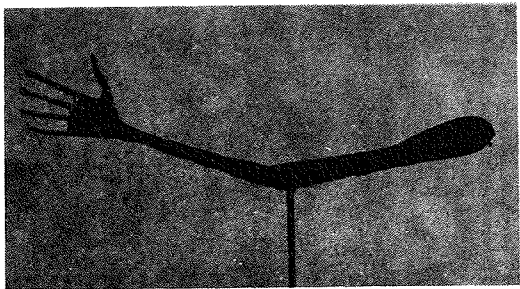
うがないのであり、何ものでもない以上、それは「無」である。「無」は裂け目としてあるのであるから、まさにこの「無」の存在の仕方が問題となってくる。

(II)

「無」は即自存在に属するものではない。前述の如く、即自存在は「そこにあり」としかいいようのないものであり、完全な肯定性であり、それ自体のうちには、いかなる否定をも含まないからである。「無」は人間存在の出現において、存在につきまとうものとして現われる。したがって「無」は対自存在のあり方である。

サルトルはこの無の起源を非存在、否定に見るのであるが、それは人間のあらゆる判断行為にもなうものである。非存在、否定について、われわれは「何ものもない」、「何びともいない」、「決して得てくる。無は存在を根底としてしかも自らを無化することができない。無が与えられるのは存在の核心においてである。しかし、無に自らを無化するという働きがあるはずがない。無は何ものかによって存在させられるのでなければならぬ。したがって、この「何もの」は無を無化する存在であり、無をたえず支えている存在であるのだが、また、その存在自身の無であるのでなければならぬ。もちろん、この「何もの」とは人間存在である。さて、世界は人間をとりまく存在のただなかに、人間が出現することによって現われる全体である。人間はこの世界に無を到来させる存在なのであるが、人間の出現の契機は否定であり、人間自身も非存在を身におびているかぎりにおいてある。そしてまさにこれが、「世界―内―存在」としての人間存在のあり方である。

人間は自己自身の無であり、世界を構成する存在との關係として超越である。「無」はこの「無化」のことであり、人間と存在との關係として超越である。



手 一九四七

成するために無化的後退を行なうのであるが、しかしそれこそ、人間存在の可能性であり、人間の自由である。人間は存在との關係において、「それがあるところのものであらぬ」存在として、また自己との關係においては「自分があるところのものであらぬ」、自分があらぬところのものである」存在（これは、過去、現在、未来の時間性で理解できる）として、脱目的にあるのである。この人間の脱目的あり方はすべての出発点であり、これこそ自由といわれるものにはかならない。そのことは、価値や可能性などのすべてが、これによって可能であることからあきらかであろう。

(III)

人間存在は何ものかについての意識があると同時に、自己についての非指定的



ネルダの肖像 1964

人間が完全な存在へ向かって根源的に投企する存在として自由であるという。人間は、人間の可能へ向かって投企するのであるが、この自由な選択と投企とは、とりもなおさず人間の実存を意味する。そしてそれは、人間が本質に先立つ存在であり、自分がかくあること、自己を造り出す存在であるということでもある。しかしながら、選択と投企は、現実との関わり合いにおいて、はじめて具体的行為になることができるのであって、その意味では、具体的行為なしでは実存はないものでもありえない。サルトルが「人間はその行為の全体に外ならない」、「行動こそ実存である」と述べているのは、とを示すものにはかならない。そして「あらゆる行為の欠くべからざる条件は人間の自由」であるとサルトルがいうときそれは人間が存在し行動するために欠かす得ないもの、それこそまさに自由があるということである。

意識としてあらわれる。人間は意識していることをそれとなく意識している存在である。いかえれば、反省以前の意識として存在する。このことは、意識が反省されたものとしての「自己」と一致しえないものとしてあることを意味する。つまり、自己と意識の間には内的否定があるのであり、意識の核心に無が出現するのである。意識は自己ではないもの、自己と距離をもつものとして、一つの欠如である。それ故に対自存在は、対目的に即目とならんとする自己への絶対超越である。この自己は全体としての人間存在であり、まさにそれが価値といわれる。したがって、価値は存在するともに存在しないものである。サルトルが、人間存在は価値を世界に到来させるものであり、人間の自由が価値をつくるというのはそのためである。

一方、対目存在は自己自身の無でもあり、対目の欠如している部分もやはり対目といわれなければならない。対目存在はこの欠如部分としての対目と一体となることにより自己となるといわれる。サルトルが対目の可能性というのはこれである。世界に可能性はない。可能性は人間存在によって世界に到来するのである。可能性は脱目的存在としての対目の一様相であり、自己の非措定的意識の極限をなしている。その意味で、人間の自由とは人間の可能性にはかならない。

前述の如く、サルトルの自由はコギトから出発しているのであるが、サルトルのコギトは反省以前のコギトであって、反省のコギトから出発するデカルトの自由とは大きな違いがある。サルトルの自由は人間の主体性であり、神の存在とは何ら関係がない。つまり、人間の主体性は対目のあり方であり、人間が脱目的存在として、選びとる存在であり、未来へ投げかける存在であることを意味している。

(IV)

人間は「あるところのものであらず、あらゆるところのものである」存在なのであるが、それは人間が充分に存在していないということの意味する。人間の自由とは、充分に存在しようとして自分を造りあげていくことであり、それは状況内において自己を選び、そして未来へと自己を投企していくことである。

人間は根源的選択として存在する。対目の構造からして、人間は選ばないなどということとはできない。人間は根源的選択により自己の存在を選ぶのであるが、自己の存在の仕方を選ぶのであって、存在そのものを選ぶのではない。いうなれば、それは世界内における自己の位置を選ぶのであって、その意味で、自己の選択は世界をも選択することになる。すなわち、世界は選ばれる目的に従って顕示される全体ということになる。

さきにも述べたように、サルトルは、

ところで、人間の行動、人間の自由は状況内においてのみ可能である。しかし、一方、状況が自由によってのみありうるということも否定できない事実である。したがって、人間はこの状況内で、「自分のあるであろうところのものの光のもとに、自分のあったところのものであるべきである存在」として自己を拘束するといわれる。いうなれば、価値≡全体とじて、人間存在は自己の自由の実現をめざして、自己拘束する存在であるということになる。

さて、自由は自己を選ぶことであり、未来へ投企することであり、自己を造り出すことであった。それ故に、当然、われわれは自己のあり方に責任がある。しかもこの責任は、自己に対する責任に尽きるものではない。なぜなら、自己自身の選択において、人間は同時に、他の人々にも要当すべきものを選んでるのであって、われわれがかかろうと望むことは、同時にあるべき人間像を造ること

にはかからないからである。サルトルが、人間は自己を選ぶことによって全人類を選んでいるのであり、全人類に対して責任があるということができたのはそのためである。

このような立場に立つ限り、サルトルのいう人間の主体性は個別的なものではありえない。そしてそこから、当然、他者の自由を認め、他者を自己の自由、自己の存在の条件として認める相互主体性の立場が出てくる。すなわち、われわれは他者の現前において、自己が他者の対象となっていることを認めないわけにはいかない。たとえば、われわれが恥しさを感ずるのは、明らかに自己を客体化して、自己をも他者として認めていることにはかならない。人間は他者と関わり、相互に依存している存在として、はじめて自由といえるのである。自己の自由によって、他者の自由はなくてはならないものなのである。

この相互主体性の立場は、人間の投企

が、たとえ個人的投企であろうとも、すべての人間にとって理解され得るものであり、したがって、普遍性をもちうるということを示している。しかし、このことは人間には先天的に普遍性が属しているということではなく、人間の普遍性が常に築きあげられねばならないということとを意味している。このたえざる創造がサルトルのいう「人間の自由」である。

(V)

サルトルの実存主義は厳しい哲学である。それは彼のいう自由が不安において意識されることからあきらかである。しかし、サルトルによればこの不安をごまかして生きることとは許されない。不安こそ人間存在の実相を示すものであるからである。

人間は歴史的状況内でしか生きられないのであるが、しかし、それは現実に即

するとか、現実に甘んじるとかいうことではない。人間の自由は自己を造り、世界を造ることであって、現実変革の可能性は、自由以外に求めることはできない。それ故に、サルトルの実存主義を觀念論であるとか、閉ざされて発展性のない哲学であるとして一蹴することには問題がある。サルトルは人間に期待しているのであり、人間の無限に続く可能性を論理的に証明しようとしているからである。結局、人間の自由を論じたサルトルがわれわれに示そうとしたことは、人間にとって行動こそ一切であるということであり、「行動こそ実存」にはかならないということである。

(サルトルの自由論のうち、その出発点ともいうべき、意識としての自由についてしか書けなかった。しかも皮相的把握でしかなかったことを読者に御詫びする。)

文学部四回生
なかむら よしお

雨の中を歩く男 一九四八



(サルトルの参考文献)

- 「自由への道」 第一部 五〇〇円
 - 佐藤 朔 第二部 五〇〇円
 - 白井浩司 第三部 五〇〇円
 - (第四部断片)
 - 「壁」(部屋・水いらす他) 三四〇円
 - 伊吹武彦訳 三四〇円
 - 「嘔吐」 白井浩司訳 三〇〇円
 - 鈴木力第 三〇〇円
 - 「汚れた手」 白井浩司訳 二八〇円
 - 「恭しき娼婦」 伊吹武彦訳 二八〇円
 - 「悪魔と神」 生島遠一訳 二八〇円
 - 「シチュアション」 佐藤 朔他訳 四四〇円
 - 「シチュアション」 加藤周一 四〇〇円
 - 「シチュアション」 佐藤 朔他訳 三八〇円
 - 「シチュアション」 加藤 朔訳 六〇〇円
 - 「シチュアション」 白井浩三郎他訳 三四〇円
 - 「シチュアション」 白井浩三郎他訳 四六〇円
 - 「シチュアション」 白井浩三郎他訳 四二〇円
- 以上、人文書院—サルトル全集より

嘔吐の周辺

伊久美一義

——『嘔吐』を中心として——



1932 女を斬られた喉

I

長い人間は、普通の精神世界の拠り所として一元論的真理を希求してきた。耐え難い不条理の不安や孤独からの逃走には、真理の一元性が便利である。彼らは、あるひとつの事物をいつも決った側面からその近視眼を通して眺め、使い古

された言葉を以って説明しようとした。しかし、ある種の絶対的一元論や杓子定規な常套的思考では、最早解明できなくなった多様な様で奇体な事物が、ふいに単純で萎微沈滞した彼らの生活の中に聞こえてくる。未知の体験が彼らの裡に起こる。それは日常懶惰性の裏に、人間が事物と自己の関係を把握した時やってくる。

る。ロカントンの場合、その明証は八嗚気Vとして表われた。サルトルの小説『嘔吐』は、こう書き始められる。「何か私の裡に起った。もはや疑う余地がない。ある日、アントワーン・ロカントンは尋常な様でない自分^にに気づく。どこかに抽象的変化が生じつつあるのだ。彼は考える。「変わったの

は私だろうか？ もしそれが私でないなら、この部屋であり、この街であり、この自然である。どちらであるべきか決めるべきだ」しかし、彼の虚ろな焦慮をよそに、現実^は相も変らず愚昧な営みを繰り返している。実際、間の抜けた標語や箴言・様々な顔・太陽・空・見馴れた町・血生ぐさい事件、あるいは色恋沙汰、△自由の恐怖Vからの逃避以外の何もでもない。彼らは、日常の混沌を忌み嫌い、処生訓に従って生きる。つまり、自らを反価値的なものとして捉えたのだ。△嘔気Vは、そうした普通の精神や消極思考への否認として生まれる。我々は、あたかもグレゴール・ザムザが、ある朝、不安な夢から醒めたら巨大

な害虫になっていた、というように、その突然の△嘔気Vをも、断定的次元で受け入れなければならない。実験小説論者のゾラならともかく、△嘔気Vまでへの過程を詳細に描くことはさほど重要ではない。何故なら、実存主義者にとっては、世界の全ては偶然であり、そこには何らの因果律もないからだ。ましてや、不条理の典型である芸術作品に条理を求めること自体無意味である。肝要なことは、現実性と非現実性との間で起こる自由の相対であり、脱出不可能な現実という粉れもない事実である。それは当然実存する自己の把握を要求する。

間。こうした考えは、フッサールの相互主観性に基づくものであり、自分に關しての認識における他者の不可欠性へ対自存在^をを意味している。それ故、彼はコギトの世界に相互主観性の折衷を閃かせたと定義を下しても過言ではなからう。例えは、出る所に出てくる一私はひとりだ」という観念は、鋭い自己解体とともに常に多くの他者との比較によって一層鮮明に描かれている。又、ロカントンと同類の人物であり、相互主観の最も重要な役を与えられた独学者やアレル氏は、非常なまでの冷静さと、貪婪な程の愛着をもって彼に認識されている。彼の思惟は、方法を多少異にするにせよ、リルケの△独自の現実Vに相通する経路を持っている。その究極は、断えざる生の絶望からの創造であり、虚無からの創造である。それはしばしば、旧世界からの脱線を意味し、従来の道徳律や無関心な価値観に敵対することもある。哲学をどう生きるかが彼の命題なのだ。

〔しかし、サルトルの掃着がアンガージマンの理論であるにも拘らず、ロカントンは事物を認識することだけに留まり、自己投企への方策を、積極的に打ち出す様子を微塵も見せない。終始十二音綴語の憂うた苦悶に審美性を増した彼の独語が続くばかりだ。〕



人物像と頭像 1965

シエストフは、その著『悲劇の哲学』に於いて言明する。
「その恐しい点は、今生きている者のうち誰も、全く誰一人として自分達の世界観の他に別の世界観が存在するかも知れぬという思いに、自ら長い間耐えきれないらしい、ということの中にある」
別の世界を説くことは、不安で恐しいことらしい。ましてや、ダーヴィニズムに麗えおのき、科学の実証に信仰を失った人間には尚さらのことである。ロマンティズムは、現実の狭小路に午睡を代って懐疑主義や厭世主義やデカダン享楽主義それに唯物主義が現実を支配した

で起こり、また大きなマロニエの根を見ても感ずるようになる。あるいは、それは実存する社会そのものかも知れない。だとしたら「嘆息」は、あまりに危険である。絶望と否定のうちに人生の無意味を見るからだ。そこではかつて多大な権威をほしいままにしていた普遍的精神や世界を秩序立てていたかに見える因果律が瓦解となって崩壊してゆく。人生の無意味や世界の無価値に気付いた人間はとうすればよいのか。従来通りの凡庸で処生訓じみた社会は、経験をひとつの権利として持っているが、それは総て過去の出来事に還元されるだけで何らの可能性をも含んではいない。既に存在することを止めてしまっているのだ。

「周囲を私は不安気に眺めた。現在だけだ。現在以外の何もななかった。それぞれの現在の中に閉じ込められた、軽くてしつかりした家具・テーブル・ベッド・鏡つき洋服ダンス―そして私自身、現在の真の性質が暴露された。それは、

存在するものであった。そして現在でないものは、総て存在しなかった。過去は存在しなかった。少しも存在しなかった。事物の中にも私の思想の中にもそれは存在しなかった。

ルドルフ・ヴィー

ンバルクが、ドイツ

ロマン派を非難攻撃した際の「死を美化してはならぬ。過去には現実がないからである」という言葉を想起させる。この文章は、一体全体存在理由はあるのだろうか、という朴訥な懐疑の外で、我々が、不安や孤独や自由を感ずることで既に存在していることを如実に示している。ロカントンは、特異な次元―時間と空間の外にある特権的瞬間と法悦の状態に生の意義を見い出そうとする。不条理に覚醒した多元な観念が、唯心論的・決定論的合理主義を拒絶するのは極めて当然である。『嘔吐』全編に流れる時間の非可逆性観念が、デカルトにおける各々切り離された瞬間と同様に、徹底的な時間に対する分析を強制するのだ。言い

II

す。世紀末の相貌は二〇世紀にまで長く尾を引く。いかにして人間は、今日の世に生きるべきかを繰り返し問い、見者になるべく「独自の現実」を求めて生きたマルテの手記の中にも、我々は、深い絶望と孤独を通してその姿を垣間見る。ロカントンはすでに世紀末思潮の襖から透れることはできない。サルトルが実存主義にとってまったく嫌悪すべき懐疑主義を、彼に与えた事実を、随処に見ることが容易である。例えば、C・ウィルソンが指摘するロカントンの懐疑主義的態度は、その好例であろう。

しかし、ロカントンの精神の根底を築くものは、何といっても、突然襲った、
△嘆息△という原体験そのものである。
△嘆息△が彼の思考であり、彼自身だ。
△嘆息△は、世紀末思潮もとも自分自身まで吐いてしまいたい気分を彼にする。それをいつか海辺で小石を波にはじかせようとして初めて知った。次第にそうした感覚は増大してゆく。キャプエ

換えれば、それは認識に到る為のひとりの態度であり手段である。ここに我々は、サルトルとブルーストとの共通性を発見することができ、と言うのは、ブルーストにあつては根源的な時間の体験(相対性理論に従えば時空間の体験といつてもよいかもしれない)が、その場合の時空間体験とは心理用語での意味と多少異なる(△が失われた時△に対する唯一最高の回復手段である)と同時に、見い出された時△への契機であるように、ロカントン―サルトルにおいても否定と同じ重要な役割を果たすからである。

特権的瞬間には「生活が稀有で貴重な特性を持つ」エレミヤ書やレビ記も、道端の石ころも、貼り紙もひとつひとつ宇宙法則や啓示やパリ国際度量衡局に大儀そうに蔵つてあるトレスカ型のメートル原器などと等しい重要性を帯び、それでいて各々特異な作用と変貌とを人間に及ぼすのだ。一切は等価値である。瞬間は無垢だ。宇宙空間の沈黙のさ中に生の愛

奏曲が高揚を促す。そうして日常の倦怠と徒労感も消失し、我々は、瞬間の中に緊張と変容の存在として生きる。静寂が、言語の代用をなすのかもしれない。十字架上の「エロイ・エロイ・タマ・サバクタニ」は、いつもと違った響きとなつて新世界を披露するとも限らぬ。特権的瞬間は不条理に満ち満ちている。それ故、熱狂は抹殺され、理性・唯心論的・決定論的合理主義）は、しつぱ返しを喰うのだ。我々は、この小説に、「私のロカンタンは可能なりや」などという馬鹿げた疑問を持つべきではない。何故なら、独自の方法で実存する人間の道具を盗み、手管を真似ること程荒唐無稽なことはいかからである。もし、我々が、この疑問を随くまで主張して譲らぬなら、即座に我々は、ロカンタンから峻拒されるばかりか、作品を破壊することにもなるからだ。実存は不条理であり、芸術もまた不条理である。そして、我々は、不条理の前に美術を知らない。ここで、前述のシエス

同じような樹がこれほどたくさんあることが何の役に立つのか。すべてこれらの存在は失敗し、軌動にも再びやり直し、そしてまた失敗する——あたかも仰向けに倒れた虫の不器用な努力のように（私もまたそうした努力のひとつだった）。刻々と進歩し、豊饒を培ってきたかにみえる素晴らしい文明は、所詮虚妄であり、混沌と惘越に陥まっている。欠落、存在基盤の震盪。そして至る所に横たわる暗鬱と空虚。もはや徒労の人生の救いを、自らにしか認めることのできぬ「福音なき人々」（カミ）には、現代における既に人々の意味をもなくなつた通俗の社会理念や道徳から漂泊し、更に総ての超越の彼岸である反覆する自家撞着の余地しか残されていない。ところで諦念が天界の夢想であり、神が混沌から生まれたる偶像であるかぎり余地は義務と変らざるを得ない。サルトルがライブニッツの予定調和説や普遍的真理附与説を厳しく排斥する理由はまさにこの点にあ

トフの言葉の思い出しに頂きたい。要するに、未知の存在形態に気付くことが最も重要な問題なのである。もし、サルトルが、我々に對して、社会規範となるべく人間像をロカンタンに与えたモラリスティックのテーゼ小説を意圖したのならば——それは彼にとって、いとも簡単なことだろうが——彼の隠れた地上的ディオニソス主義が、即刻ストイシズムと何ら変らなくなることを意味するであろう。そして、ストイストが、運命論者であることは誰しも知っている。こうした観点からみてロカンタンの実存の一目録であり、旧世界神話の偶像破壊に疲れた単なるひとりすぎない。

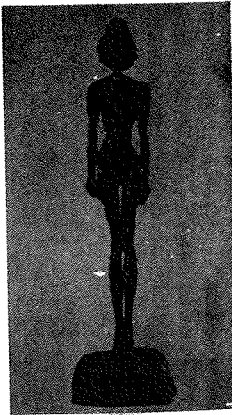
III

さて、マルクスは、「ドイチェ・イデオロギー」「フォイエバルツについて」のマルクスII¹⁾で、哲学者達が、世界を

るのである。そして、この義務こそ、カミ、が、穏やかな表情裡に鋭い精神を以って完璧に寓論するシューボスの神話、つまり現代における原罪の追求と度重なる挫折や努力の意味の象徴に他ならない。敢えず換言するならば、それは如何に自己を創造しようかという人間究究のオブジェとして表現され消化されるに違いない。

こうしてみると実存文学の露呈する主題が、伝統的、普遍的価値観や生活の中に異喩した日常懶惰性（「存在と無」）によれば自己欺瞞の否定とその超克であり、又絶対的なものを認めるプラトニ哲学に典型的にみられる現実回避の彼岸主義放棄であることがわかる。超克——超克と僕は書いた。超克とは、

いろいろに解釈してきただけに終り、一遍の変革をも試みなかったことを非難したが、サルトルは、その責任の領域を選良や健全なる市民にまで拡げる。神が存在せぬ以上、世界にも人生にもアプリアオリな意味や価値はなく、人間ひとりとりが、自己投企によって自ら、世界と人生とに、意味と価値を与えなければならぬからだ。しかし、実存の有限性は悲しくも、人間の永遠への志向意識と情熱とを打ち砕く。「人生は徒労の情熱」であるが故に悲劇だ。こうした世界では市民の安楽椅子として寵愛されたエラスムス流の福音の人文主義が擲り去られ、プロメテウスの英雄観や大胆な行動は、勿体ぶって不安な暮然に凝結させられる。生物的新陳代謝だけが、後にも先にも繰り返される。こうして不用な無言劇の幕がある。



女の小像 1954

何か。サルトル哲学の場合、自己投企により出来事が發生し人間が存在づけられる。あるいは存在する。又出来事が、人間を分析する自己投企ならば、それは、ヘーゲル左派、マルクス以来の実践主義に凝縮還元される行為であると言わざるを得ない。まさに、アンガージュマンの理論がそれに適合する。しかし、我々は「嘔吐」に、それを見ることができない。

ところで「旧約聖書」をみると「天使を見たものは死ななければならない」という有名な箴言がある。ロカントンは、天使を見たが故に死んでゆく。何もここでは肉体的な死について、死の無機物性について言及しようとしているのではない。安直な態度で現実を誤魔化しながら生きていく人らしくて凡庸で権利を大盤振りに要求し、自分の凡庸で老化した存在を誇示する市民社会の中で、彼は存在という天使を知ったが為に死んでいく。彼はカルタが配り損ねられたのに気付く。しかし、その時既に彼はあまりに明晰な失敗者であった。眼前の無駄に与えられた人生への驚愕、連綿と続く無味乾燥。彼は何もせずただ存在を自覚してゆくだけである。存在の認識は強烈であり危険といえは危険だ。一切が偶然で無価値な世界へと引きつり込まれるからだ。彼については、耐えきれず自分を吐いてし

まうのかも知れない。

ここで、僕は冒険を覚悟で、ロカントンとバザロフとの比較を試みようと思う。バザロフとは、周知の通り「父と子」の主人公であるニヒリストの名前だ。バザロフは、その有り余る分析能力、異常に研ぎ澄まされた精神にも拘らず、その能力を、一向に社会に役立たせようとはしない。それどころか彼は、民衆を嘲笑し、宗教・哲学・芸術しるしには彼の専攻分野である科学をも信しようとはしない。彼は、常に否定の中に自己をみつめて生きる。そして絶望の果て、虚無の爲の虚無主義へと落ちてゆく。絶望から虚無、絶望と虚無は不可分である。あたかも、浮浪ホヘミアンと文学との関係のように。実際、サルトルが、次第に修正マルキシズムへと移行したように、絶望はしばしば人間が自力でこの地上に建設しようとする未来社会の絶対化、そこで成就されるべき人間の自己救済（マルキシズム）という形をとる。√御多

聞に洩れずバザロフの虚無主義もヘーゲル左派の唯物論にその端を発している。しかし、彼ら二人は現状を維持するだけである。終着までの経緯がどうであれ、二人とも否定に生き着る在基を失なおうとして、両者の間に類似性と相反性の決定的な溝がある。つまりこういうことである。

バザロフの存在基盤喪失が、ニーチェ以前の西欧思想の長年に渡って堆積された主観主義による存在忘却の所産であるのに対し、ロカントンの存在基盤喪失の根源は、疑いもなくニーチェ以後、まさしくニーチェから——白昼に提灯を点しながら神を捜し求め、「俺達が神を殺した」と言い廻る狂人のアフォリズムによって注目を引く「悦ばしき知識」から生まれているのである。このニーチェの不敵で偉大な所業こそサルトル——ロカントンの存在基盤への扉を開く黄金の鍵となっているのだ。そして、重要なこと

は、ロカントンの場合、存在基盤即ち存在基盤喪失ということである。では最早ニーチェ以前（存在忘却）にも以後（存在基盤）にも、徒勞なる人生の否定は、し難いのか。敬虔なるキリスト者よ。油を注がれし者よ。お前なる言うてであらう。「神に忠実でありなさい。すれば貴方は、小さな群れや他の羊の仲間となって楽園にいるでしょう」しかし、ここで問題となる人間は、誰からも理解されない。無関心に気付いたらしまった孤独者である。絶望しか知らぬ局外者なのだ。

救済は公式の外に在った。否、外に作られる客である。数学的領域の外、時空間の対象外に。ロカントンは、本を書く存在を肯定しようと考えたからだ。一冊の書物。記述。混沌に因果と秩序を与えようとする試み。残る感覚。こうしたものはあの特権的瞬間と恍惚の状態にわずかに垣間見ることのできた有意義で徒勞でない人生へと続くかも知れない。否、

確かに続く。特権的瞬間には、絶対義務化された特定の動作が要求される。それは、半可通な思考では決して実現できぬ程高貴な出来事なのだ。そして、その特定の意識の拡大は意識の拡大なくして何である。意識の拡大。僕は、逆説で断言する。意識の拡大は、絶対義務化された動作を意にに至って、あらゆる意識の意識を越えて無と帰すことを、それ故、特権的瞬間は無垢であると言ったのだ。時空間の外にある無垢な特権的瞬間こそ実存する自己の把握を行う唯一の場なのである。そこで感覚の蓄積が、印象を細部に渡って因果だてる。ロカントンは、デカルトの思惟の世界に自己を発見する。ここで、我々は、決して見逃してはならない。コギトの世界が、意識と存在は一体をなすという大前提の基に成り立っているという事実を。

（評者は文学部二回生）
いくみ かずよし

（サルトルの参考文献）

- （二七ページ）の続き）
- 「想像力の問題」 平井啓之訳 五〇〇円
 - 「実存主義とは何か」 伊吹武彦訳 二六〇円
 - 「哲学論文集」 平井啓之訳 四六〇円
 - 「存在と無」 竹内芳郎訳 各四六〇円
 - 第一・第二・第三分冊 各四六〇円
 - 「方法の問題」 平井啓之訳 三〇〇円
 - 「弁証法的理性批判」 竹内 芳郎 訳 六〇〇円
 - 矢内原伊作 訳 四〇〇円
 - 「弁証法的理性批判」 平井啓之 訳 四〇〇円
 - 森本和夫 サルトル全集より
 - 以上、人文書院
 - 「サルトル」入門」白井浩司著 二五〇円
 - 「人いらず」 現代新書 二二〇円
 - 「聖ジュネ」 上・下 各三〇〇円
 - 「悪魔と神」 一六〇円
 - 以上、新潮文庫より

サルトルとマルクス主義

渡辺 幸博

——実存主義はマルクス主義に対立してではなく、その余白に発達したものである——『方法の問題』

サルトルの思想の推移あるいは展開を書評をかねて論ずること、これがわたしにあらえられた課題である。とはいえこの短い論評において、それを完全に充た

I

されてきたものであるが、この時期におけるサルトルの思想は、周知のようにとくにマルクス主義とのかかわりにおいて展開されている。したがって本稿においても主としてこの点に焦点を定めることにしたい。わたしがこの短評のテーマを「サルトルとマルクス主義」と名づけたのはそのためである。

かねてからわたしはサルトルの思想を「現象学的存在論」から「弁証法的理性」への展開の相ともに総体的、具体的にとらえることに努めてきた。いうまでもなく前者は「存在と無」(一九四三)の副題になっているものであり、後者は一九六〇年に刊行された「弁証法的理性批判」の主題となっているものである。(一九六〇年以降、今日にいたるサルトルの歩みは、ほぼこの時点において確立された方法の具体的展開であった、といつてよい。たとえば一九七一年発刊の『ロバール論』一族のなかの低能児)はサルトル自身によって「弁証法的理性批判」

すことは、とうていわたしのよくするところではない。サルトルにあつては、かれの生きてきた人生の「こま」こまがそのままかれの思想といわれるべきものであつて、それはかれの膨大な著作とあいつつて簡単な注釈や図式的な解説を拒む

の統篇であるといわれている)。サルトルの現象学的存在論は、当初から意識を状況内存在としてとらえている。つまりサルトルにおいて、意識は世界との直接の関係以外の何ものでもない。そしてこのことは、われわれの実存とそれにもなう状況とそが問題であるとするサルトルの基本的立場を導くのであるが、それはただちに意識がそれ自身一つの行為として、状況における人間の実践の最初のモメントであることをあきらかにする。もつともこの時点にあつて、状況とのかかわりにおいて、とらえられた実存

の問題は、人間が諸価値の根源であるかぎり自らの行動に深い責任をもたねばならず、いかなるいいのがれをも許されないとしよう実存的倫理に集約される。これらのことは自由を蔽ひかくす自己欺瞞の告発に象徴されているように、初期におけるサルトルの思想が実践を志向しながらも、どちらかといえばその観念性を拭い去りがたくもつていたことを示

からである。さいわい今回わたしに呈示されたのは「シチュ・アシオン」Ⅲ、Ⅵ、Ⅷの三冊である。これらに収められている作品は一九四五年から一九五七年にかけての論文や評論、時評など、主としてかれの主筆する「現代」誌を中心に発表

している。しかし一方、この現象学に立脚する基本的立場が、同時に来るべき具体的実践への道を準備するものであつたことはいうまでもない。これらの経緯についてはここで詳しく論じるいとまはないが、ここではサルトルの現象学的存在論が状況の哲学といわれるべきものであり、それがただちに実践の哲学へといったものであつたことを確認するにとどめておこう。そして本稿の主題であるマルクス主義との関連は、まさにこの実践の具体的状況をめぐつて展開されるのである。

サルトルの思想はつねに現実的状况に密着するところに生まれ、しかもそこには、けつして一面的局所の見方に偏しない全体的総合的立場を守ろうとする姿勢がある。「シチュ・アシオンⅢ」の「唯物論と革命」において展開されたマルクス主義批判が、ソ連において生まれ、そして各国に派生していたスターリン主義を批判するものであつたことも、このこと

と無関係ではない。その意味でこの時期から「シチュエーションⅧ」にいたるあいだのマルクス主義に対するサルトルの思想的変化が、この歴史の現実としてあったスターリン主義をめぐって、とくにフランス圏内における党と、それをとりまく情勢に対応したものであったのは偶然ではない。以下、簡単にその変化をあとづけることによって、その意味するところを確認してみよう。

Ⅱ

「唯物論と革命」においてサルトルは唯物論を客観性の神話と断じ、具体的状況に立脚する目らの実存的立場こそが革命の哲学といわれるべきである、と主張している。もともとサルトル自身が断わっているように、ここで批判されているのは、スターリンの新マルクス主義であってマルクス自身ではない。このことは

サルトルが、マルクスとエンゲルスとのあいだに大きな断絶を見ていることを示している。たとえば「エンゲルスとの不幸な出会い」という一語は、このことをあまりなく物語るものであろう。そしてわれわれは、そこに二つの事実を見てとることができる。一つはサルトルが初期マルクスの立場に深く賛同していたということ、いま一つは、かれがエンゲルスに端を発する科学的立場を、スターリン主義の理論的根拠と考えていたのではないかということである。

このサルトルの立場は一九四四年一月の「現代」誌の創刊の辞、「シチュエーションⅡ」所収において表明された社会的自由をめざした作家の責任について議論を知るものにとつては別段異とするにたりない。すでにこの時点において、サルトルは労働者の側に立って、人間による人間の搾取を終結せしめるべく努力することを決意していたからである。しかしそこで考えられていた社会的

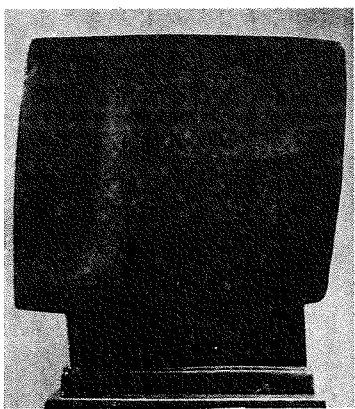
自由が、資本主義的自由を超えすぎたものであったことは、もちろんであるとしても、さらにそれは個人に眼を向けることなく、もっぱら集団だけを見る全体主義的専制（スターリン主義）をも否定するものであった。「唯物論と革命」における立場は、ここですでに確立されていたわけである。

ところでわれわれは、このサルトルの立場が、初期の疎外論を中心とするマルクスにくみするものであったことについては、それに対する賛否はともかく、その事実を事実としてこれを認めるにやぶさかではないが、エンゲルスの理論とスターリン主義との因果関係、ひいてはエンゲルス以降のマルクス主義に対するサルトルの理解にかんしては、必ずしもそのまま同調することはできない。もちろんそれだからこそ、その後サルトル自身の立場に変化が見られるわけであるが、その際それは、党や現実の状況との直接的関係において顕著であって、その理論的面的理解は、むしろそのことによって

間接的に変わったのではないかと考えられる。

サルトルによれば、科学は弁証法と相容れない。なぜなら科学の世界は量の世界にはかならないからである。より端的にいえば、サルトルにとって弁証法は、その発展のために否定を不可欠の契機とするが、マルクス主義のいう科学的物質の世界にはそれが欠けている、というわけである。たしかにエンゲルスがいうように、自然のなかにはいたるところで対立があり矛盾が認められるとしても、これを対立、矛盾と認める意識がなければ、それ自体は何ものでもない。ここには「意識は物がなければいかなるものでもありえないが、物は意識がなければいかなる意味をも持ちえない」という唯物論的現象学ともいわれるべきサルトルの基本的立場がある。とはいえ科学と弁証法という二つの方法をむりやりに結合させようとする唯物論の努力は、ましがった総合の典型である」という断定は連断

のそりをまねがれえない。もともとサルトル自身、のちに分析的方法を総合的方法に欠かしえない「契機」としていることにもあきらかなように、けつして科学



見つめる顔 1928

を否定しているのではないのであって、このことはただこの時点におけるマルクス主義の科学観に対するかれの無理難題を示すものであろう。

ところでマルクス主義が、自らの社会主義を科学的客観性に基礎づけようとしたことはあらためて申すまでもない。そして、マルクス主義における科学が、たんに量的なものに還元される因果的なものではないこと、すなわちマルクス主義のいう科学的真理がたえずアウフヘーベンされる相対的真理を意味していることを確認するのは容易である。もともとたとえばエンゲルスの叙述のなかには、主体性ともまったくかわりのない自然の弁証法的発展の思想を読みとることができるのであって、その意味ではサルトルがスターリン主義の理論的根拠をエンゲルスに見たのもうなずけないことではない。しかしエンゲルスとても、もち

ろん人間を排除したり無視したりしていたのではなく、むしろ「人間による自然の変化」を強調している。またエンゲルスが「従来の自然科学と哲学とは人間の行動の人間の思考におよぼす影響を無視してきた」（「自然弁証法」というとき、そこには自然における人間の働きを正しく認識した弁証法的態度を見ることができるとであろう。ここはこれらの点について詳しく論ずる場ではないので、一例をあげてエンゲルスとサルトルとのあいだに見られる基本的相異を明確にしておきたい。たとえば「自由は自然の諸法則を特定の目的のために計画的に作用させる可能性のうちにある。……だから意志の自由とは、事柄についての知識をもって決断しうる能力ということにはほかならない」（「反デューリング論」という八頁目と必然に）かんするエンゲルスの言葉がある。これに対してサルトルのいわんとすることは、たしかに目的を遂行するために自然の法則を知ることが必

要であるが、むしろこの目的をたてることにこそ自由があるのではないのかということにあるであろう。このように両者ともひとしく具体的に全体的な弁証法的領域に立脚しながらも、そこに微妙な違いがある。しかしこれがまた重大な相違といわれるべきであることも認めざるをえないであろう。

III

ところで、ここに見てきたサルトルの立場はもちろん当時のフランスの政治的情勢と密接に関連していた。すなわち社会党は右帰回して次第に労働者の党であることをやめ、まったく無力化していくのであるが、そのため社会党はなれたものの大部分が共産党、人民共和派のいずれにも属さず政治に無関心になる傾向が見られたが、サルトルはこのような現象が民主主義の伝統とその可能性を破



男の頭部 一九六四

壊すると考え、これらの人びとが参加することのできる真に民主的な連合を組織することを企てている。したがって連合の性格はもちろん一切の保守化に反対するものであったが、共産党や社会党とも異なるものであった。すでにあきらかによように、これは「唯物論と革命」にも表明されているサルトルの基本的立場にもとづく最初の具体的実践といわれるべきものであった。サルトルは集団に対して個人々が責任をとる可能性がなければならぬと考える。つまり表現、批判、討論といったものを禁止するならば、真の意味の労働前衛を準備し形成することはできないではないかというのである。そこにはマルクス主義が非常にスコラ的になっていくこと、前進するためにはこれを打破しなければならぬという認識がある。スターリン主義が経済的特権をもって労働大衆を搾取する歴史的社会的形式であること、サルトルはこれを反資本主義的國家主義とさえいっている（サルトル、ルーゼ、ロザンタール「政治にかんする座談会」一九四八）。このような見地からサルトルは具体的に組合の統一の必要を説き、さらにはヨーロッパ社会主義連邦を組織して、各国の労働者階級を中心とした民主的層の相互関係をたてることをめざしている。

このようにサルトルらの連合構想は比較的具体的であったにもかかわらず、その運動の時を経ずして挫折する。その理由はここで詳しく分析することはできないが、ただこれらの連合が現実の社会に容れられるにはまだまだ理想的であり、非現実的すぎたということも事実であろう。かくてこの時期までのサルトルは労働者の側に立って戦うことを欲しながら、客観的にはただ欲していただけにすぎなかったことになる。そしてそのことを誰よりも身に沁みて感じていたのがサルトル自身であった。しかも自己の自由の思想と相容れないスターリン主義をきびしく批判しながらも、行動の面においてサ

ルトルはどうしても共産党を無視し否定することができない。レジスタンス運動のときから、サルトルはコミュニストたちが眼を自張するような成果を挙げたこと、かれらには装備と組織と訓練があることを知っていた。事実サルトル自身いかにこれらの組織が矛盾を孕むものであっても、そこへ参加している人びとの真実性、偉大さを一種の羨望に似た思いで認めてさえる。

この時期のサルトルの関心の一つはブルジョアの子弟と党とのかわりについての問題がある。「シチュアシオンVI」の「冒険家の肖像」（一九五〇）はまさにそれである。そこではブルジョア階級の間が、いかに分裂にさらされているか、ということの認識から出発して、良家の子弟がけつして闘士になりえないゆえんがあきらかにされている。ここでいわれている闘士とは普通一般のコミュニストを意味する。かれらに比しては「入党はまさしく人間界への加盟に相当する」、

「党はかれの自我を奪うどころか逆にあたえる」のであるが、それに反してブルジョア階級においては自我が早から芽生えるゆえに、たとえ入党を許されたとしても時すでに遅く、かれらはブルジョアの自我から逃れることができない。サルトルが「闘士であることを欲するものに闘士はいない」というのはブルジョアの子弟のおかれた状況を示している。かれらは冒険家ではかありえないのである。

これらのことの詳細は直接原文を読んでもいたくはかはないが、その際、戯曲「汚れた手」（一九四八）をもあわせて読まれることをおすすめしたい。そしてサルトルが「闘士の勝利に拍手を送つたのちに、わたしがつき従うのは冒険家の孤独の道である」というとき、そこにはブルジョアの教養に育まれた知識人サルトルのきびしい自己認識がある。しかしこのことは、サルトルが革命運動には主体性の必要がないとか、その介入の余地すらないと認めたということではない。冒

険家か闘士か、わたしはこのディレンマを信じない。……必要なのは否定性、不安、自己批判を規律のなかに回復することである」というサルトルの言葉がこのことをよく示している。

「チトー主義論」（一九五〇）もこのことに関連している。これは一九四八年、チトーがスターリンによって、その民族主義的修正主義的偏向を非難され、ついでユーゴスラヴィア共産党から除名された事件にかんするものであるが、この必要問題は生産の強化という普通の必要性と、プロレタリアートの個人的欲求とのあいだの矛盾としてあきらかにされている。なお革命を推進する党と民衆とのあいだに生ずる極端な矛盾をテーマとしたものにシナリオ「歯車」（一九四八）がある。一読の価値がある。

IV

「共産主義と平和」（一九五二―五四）

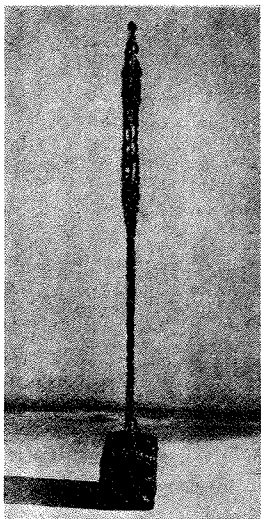
はサルトルがはつきりと共産党擁護の態度を表明したのもとして注目すべきものである。もちろんサルトルの立脚点はいくまで労働者階級にある。「人間の敵となり、自分自身の敵とならざるは、人は労働者階級と戦うことはできない」というサルトルの言葉はかれの一貫した立場を示すものである。さてこの論文はアイゼンハアラーの後任としてNATO（北大西洋条約機構）最高司令官に任命されたリッソヴェーのバリオリ

ンに抗議するデモめぐって書かれたものである。サルトルにとって、党に加えられた弾圧と誹謗はとりもなおさず労働者階級に対する弾圧であり誹謗であった。それは「はつきりした政治的党派として構成されたプロレ

タリアートとは、フラ

ンスにおいてこんにち共産党によって組織された勤労者の全体以外の何であらうか」という認識にもとづく。そしてそれは「党が力をつきた労働者たちの力であり、絶望する人びとの希望である」、**「党自体のはかにいったい何が大衆の粘着力を維持し、大衆の行動の効力を確認するのか」といわれているように、サルトルが共産党に労働者の活動の媒体としての意義を認めたということの意味する。もち**

ろんサルトルは全面的に共産党に同意したのではない。かれは党との一致を宣言するのではあるが、それは一定の限界においてであり、あくまでかれ自身の原理から発してのことであつた。ただ歴史的現実の分析とそれにもとづく現況判断から、サルトルはスターリンの官僚主義すら頭から否定し去ることをせず、逆にスターリン主義の歴史的形成的意義をあきらかにすることに、そこに見られる誤謬を解消する方向に歴史を動かさねばならないというのである。したがって、この時期のサルトルは党にこれまでになく密着しているだけ、なお一そう党に対する批判を行っている。このようにサルトルは、共産主義がそこに見られる種々の矛盾にもかかわらず

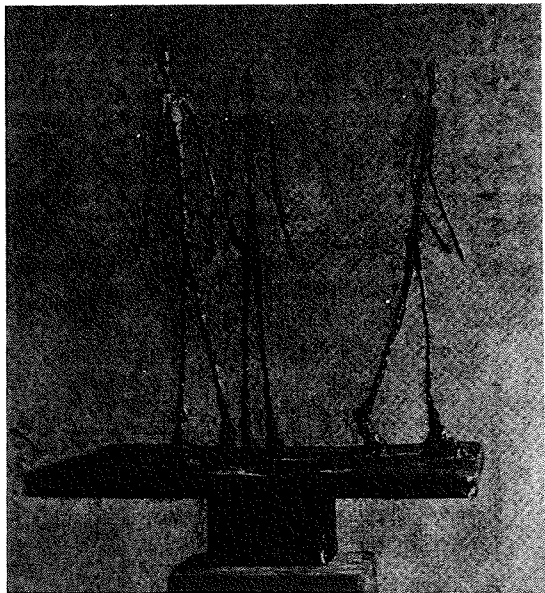


大きな人物像 1948

ず、社会主義の可能性をもつ唯一の運動であることを認めるにいたる。

「シチュアションVII」の「改良主義と物神」(一九五六)において、サルトルがマルクス主義をたんなる一つの哲学としてではなく、われわれの思想を養う風土として考えているのもこのことと関連している。しかしその場合でも、サルトルは共産党が歴史に支えられたすばらしい客観的知性を示しているにもかかわらず、この知性が党の知識人たちのなかに血肉化されることがあまりにも少ないことを指摘するのを忘れない。「精神の世界はかれらのものだ。かれらはそれを取りあげさえすればよい。ところがかれらは一向にそれを取りあげようとしないのだ。まるでかれらは一つの障地を支えているかのようである」というときのサルトルの真意は、マルクス主義が真正しく生きることを要求するところにあったのは疑いない。

同じことは「スターリンの口蓋」(一)



歩く三人の男 一九四九

九五七)についてもいえる。すなわち、「共産党を除外して団結することは無力になるにきままっている。共産党に反対することはフランスに門戸を開くことになる。要するに解決はただ一つ、共産党と共に統一行動することである」といわれているのがそれである。もっともサルトルの立場はスターリン主義の歴史の必然性を認めるとしても、すべてをそれに帰することによって正当化をはかる自然的決定論ではない。かれがいちばやくハンガリー事件を批判したのもそのためである。サルトルはハンガリー事件を、まさに死なんとするスターリン主義の臨終の苦しみと見るのであるが、同時に世界的紛争をさげられないと見る責任者の信念にもとづいてこの介入が行なわれたということから、それがブロック政策と冷戦の犠牲でしかないことを明確にしている。このように左翼に賭けたサルトルにとって、いまや問題は共産党の硬化、停滞をいかにして防ぐかということにあっ

たことがあきらかであろう。「方法の問題」(弁証法的理性批判序説一九六〇)はこのような立場に立つにいたったサルトルの思想の一応のまとめであったということが出来る。

以上われわれは簡単にマルクス主義に對する立場を中心にしてサルトルの思想的推移をあとづけてきた。そしてわれわれはその展開もっぱら具体的歴史的状况において行なわれてきたことを確認することができた。なかでも現象学的存在論から具体的状況に立脚する実践の哲学への展開の契機が第二次世界大戦であったという事実、さらにはフランス共産党を労働者階級の中心にするにいたる展望の契機が、自ら企てた民主連合運動の挫折にあったということは注目し得る。

本稿ではとくに後者に焦点を定めてきたわけであるが、そこに見られる変化はきわめて重大である。そのことは冒頭にかかげた「方法の問題」のなかの一節においてもあきらかであろう。というのはサ

評者は文学部助教
わたなべ ゆきひろ

『アウトサイダーを超えて』

曾和信一

「アウトサイダーを超えて」
C・ウィルソン 著
中村 保男 訳

(I) ラ・パリスの真理

今、思惟を僕の中に収斂する作業から始める前に、僕は自分が二回の「年輪」を刻み続けてきたものの、その低次の思惟の段階で、のたうち回り続けている奇立ちを自己に寛えながらも、書き続けていく事を前置きして、そこからのごと

イデンティティの危機に関連して、どのようにして、どこ迄、自己疎外を超えら契機となりうるか、ということ。

以上の二点を基軸にさせながらも、様々な問題に派生していくこととするが、「アウトサイダーを超えて」との関連で僕なりの仮説的結論をキバらずに提出しているれば、と考えている。

(II) 「アウトサイダーを超えて」を超えようとして

コリン・ウィルソンとその著書「アウトサイダーを超えて」について言及していく際に、際物めいた哲学的概説書に頭を悩ましながら読むのであれば、この著者が街いながらも実存主義哲学と現象学に深い造詣を傾けて、それらを歴史的に考察し、新実存主義哲学の基盤の創造を展開しているの、それらの哲学に多少とも関心を抱いている人ならば、批判的に見据える視点でもって接するならば一読

に取り掛かる作業を始めたい。

僕等が世界観を確立していくこととする際に考え続けていかなければならない事で、現在の僕のもの見方・考え方・感じ方でもって関心を抱いている問題点を挙げていく事に依って、この拙文を読む主体者であるあなたが、「これ、こういう点で可笑しいのんと違いまっか」と

するに値するように思える。

そう、僕等がどのような書物を読む時でも、批判的な態度を形成していく必要に迫られるが、それを媒介するものとしての「醒めた眼」と「豊かな感受性」とでもって、持続しながら接していくことを大切にしなければならぬと思う。

そして、「アウトサイダー」の問題に立ち入らうとする時、この著者はそれに二つの側面があることの認識の必要を説いている。つまり「社会における個人の問題」であり、「実存哲学の問題」である。又、「アウトサイダー」と「インサイダー」との相違点を提出して、「世界を見る二つの見方に従って二つの基盤がある」と指摘する。それをトルストイのエピソードでもって説明している。トルストイは一人の士官が兵士を殴っているのを見て、「お前は聖書を一度も読んだことがないのではないかと、くっつかうか。士官はそれに答えて曰く「あなたも軍隊の規則を読んだことがないの

否定する方が、肯定するよりもむしろ生産的である事を絶えず相互に確認してきた。

第一点として、僕(等)の存在とは何かという問題と、それが生活していく中でどのように関わり合いを持っているのか、ということ。

第二点として、沈黙を超える実践がアかね」。ここで違いがはっきりしてくる」と。

ここで、僕は「社会における異常な個人」という問題点からのごとを考え始めたい。それはまさしく陰函紙に焼き出されくつきりと浮かび上がるのかのように、社会の病理と表裏一体を形成するが故に、「実存哲学の問題」だけでは限定しえないというのを考えている。又、「実存哲学の問題」という角度から接近する事で焦点を見定めようとする程に、そこに社会における「異常な個人」が浮かび上がったくて、社会の病理の穴落という大きな陥穽がぐるぐるを引いて僕等

を待ちかまえている。

僕はここにこの著者の「自己に対する真摯」を認めつつ、同時にその中に内在する「恣意的な真摯」を見出さないわけにはいかない。この点でもって僕(等)は「アウトサイダーを超えて」を超えようとしていく第一歩を踏み出しうるだろう。

(III) バベルの塔への志向

この著書の第四章は、ハイデッガーとサルトル「存在の問題」とりわけ「実存的存在」の問題を言及している章である。僕なりのもの見方・感じ方・考え方で、この著書の存在の問題と関連させて考察していく作業にとりかかっていく事にする。

この著者はハイデッガー、サルトル、カミュ等を「ベシズムは当人の幼少時代に苦悶がなかったという事実と、しばしば結びついている」という逆説的な仮説でもって、その内在する矛盾を分析しているように見えるが、この仮説は「負の目」と連関しているように思えるものの、余りにも穿ちすぎた妥当性の乏しい仮説のようだ。僕はこの著書の自説の展開を有利な方向に導く為のソフィスティケーションをそこに垣間見る。

そのような論理でもって、彼等を悲観主義的な実存哲学であると断定する。

そう断定する事に依って矛盾は一層激化

され、彼等に対峙しようとする能動的意識でもって、自らの楽観主義——C・ウィルソン自ら楽観主義であることを自認している——的哲学を、一切の先入観を排し、意識に直接に明証的に現われていた現象を直視し、その本質を記述しようとした「フッサールの現象学の方法に基づいた素材——志向性であるところの関係の基盤を創造し、総合しようとしている。それは新たな思维の一方としてそれなりに評価されようが、その視点は通か地平線の彼方ばかりを眺望しているように思える。例えばサルトルのように、政治的事件に絶えず自己を閉らせ、明白な態度でもって自らの殻を破りながら、自分の思想の発展を企図しようとする、そのような在り方とこの著書のそれとは異質的なものであるように思える。俗な表現を用いれば、何処か浮いているように

思える。果たして僕だけの偏見だろうか。このような点において、この著者のバベルの塔への志向を垣間見るのは。

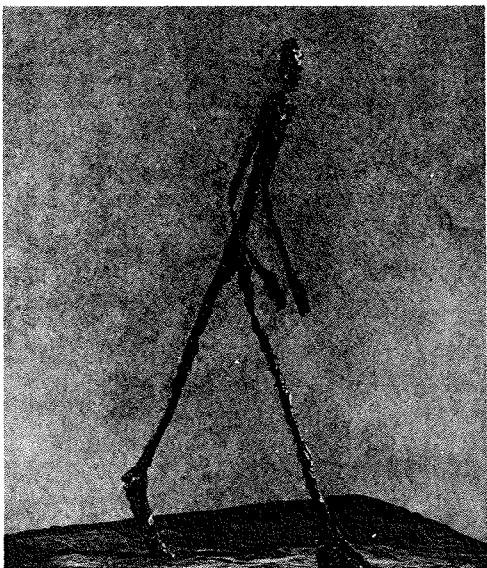
(IV) 汝自身、それ程に……

今、僕は存在の問題に固執する。僕等が生活する重みをヒシヒシと感じる中で、自分の存在とは何か、という事を今一度問い直す深刻な反省をしなければならぬ時期に差し掛かっているのではないだろうか。

この著書の第四章はハイデッガーとサルトル「存在の問題」とりわけ「実存的存在」の問題を言及している章である。その中でサルトルの存在の三種類として、「物は「即目」存在を有して」おり、「人々は「対目」存在を有する、なぜなら、意識は(物はそうしないのだからして)それみずからのために(Chonnois)。(対目的に)存在するからである」とい

うヘーゲルの思考を援用しつつ、その呪縛の如なり鉄鎖を解き放ち乍ら、「最後に、対他存在がある。これは、われわれがみな他人の眼の中に存在しており、われわれの自分に関する評価は、他人がわれわれをどう考えているか、ということから来る、ということの意味」している方向へと導く。「対他存在」なるものは、アメリカ社会学の泰斗D・リースマンが、「孤独な群衆」の中で言う「他者志向型」(the-other-orientation)との連関で把握するのも良いと思う。尤も、それに価値を置くか否かという問題も考えていく必要もある。

何故、僕がわざわざこの文章を引用したのか。その理由として、僕のささやかな体験をC・ウィルソンが示唆してくれていた「私の内なる存在がばつと照り輝いたり、硬化して現実となったりするように思われる突然の強烈さの瞬間はどうなのであろうか」に符号してくるから。それはベルグソンの「意識と生命」の中で



広場を横ぎる男 1949

「生命の躍動」(*eterna vita*)にも関連性を持つてくる。僕のささやかな体験とは「強くなる。論理では説明しえない「にんげん」の強さ。その強さを獲得する。それは優しさが弱さの裏返しである事的前提を認めた上で、優しさが弱さを超克するところに強さがある」と言う能動的意識であった。

自覚し歩み始めた僕等の自我を基軸にしていけば、その内的深化と外的拡大とでもって、個人我と社会我との発展と葛藤があり、その両者の均衡を保つという危険な綱渡りをしながら、自我を成長させていく。又、一個の自我が別の自我と関わっていく時、「社会的存在」としての自己が形成され、それは「実存的存在」としての自己も形成されるという前提に立てば、僕等一個の自我たる「存在」は、僕等各自のものであって、同時に僕等各自のものではないという仮説的結論に達する。別の表現で言及していけば、僕等は自我に目覚めて社会の一員に本当に主

これはこれでホノネを語っていることを認めよう。しかし、僕等若者文化の躍動の中で生活しているものにとつての問題とは、ここが、大切なところであろう。確かに僕等はE・H・エリクソンやアイゼンクラーが強調してやまない「アイデンティティの危機」を体験する機会を殆ど与えられないままに、又、獲得して内在化させないままに、大人文化に組み入れられてしまふ危機的状況に置かれているのではないか。

「若々しい老人」のその危機的状況への警鐘を僕の耳朵に真摯に受けとめるにはどのようにすれば良いのか。僕は、「自己課外の克服」の契機を、「沈黙を超える実践」に求めようとする時この「アイデンティティの危機」の欠落から、それを内在化させ、その危機を克服し、持続していく各人の「アイデンティティ」が必要だと思ふ。ここで、丹下庄一はエリクソンのいう「アイデンティティ」を次のように説明している。「それは、内

体的参加をする、又、せざるをえなくなくなった時、僕等各自の「存在」は相対的な意味での社会のものであり、同時に、スパーの効かない「僕の自己に対する誠実な存在」(アルペール・カミュ)を検証し直すということでも、僕等各自のものであろう。そして、両者が、どのようにして、どこ迄、相互に作用し、相互に依存し合っているのか、という事を僕等各自が生活する中でこそ考えていく必要に迫られよう。

(V) 沈黙を超える実践とは

いよいよ、思惟を僕の中に収斂する作業も一時的終結に近づいてきた。C・ウィルソンは、この著書の第五章で次のように語る。「今やウェルズには唯一つの可能な議論しか残されていない。それは「主観的」な議論であるが、同時に真実であるという利点をもっている。ウェル

的な自己の同一性と連続性ということであり、過去、現在、未来を首尾一貫した全体へ結合することである」と。

僕が、この文を書き続けている間、大生協新聞第五四号に関西大学部落解放研究会の投稿が掲載されていた。その結びのところで「現在、「書評」で思想運動の展開を試みているが、思想が思想として確立されるには、具体的な入現実の変革Vを経ることが決定的に重要なものとしてあるでしょう。そういった意味で、思想運動は具体的な行動提起、その総括、それらと結合される必要があるでしょう」と書かれていた文章が目にとまった。この文章の中に、僕(等)にとつて多くの示唆が含まれているが、今、総体としての実践とは何かという問題を考えよう。

僕等は「実践」という概念をどのように把握したらよいのだろうか。(今、僕は言語の壁の前でウロウロしている自分を感じる。)それは、僕等各自の取り巻

ルズはこう言っている。「私が自分の知識への欲求について知っている唯一のこととは、それはきみが今定義した意味では利己的ではない、ということだ」……「それは、知識は、自分自身のうちに新しい可能性を開くことができる、という発見である。……支配は、この覚醒の副産物でありうる。しかし、これに関する最も意味深いことは、これはいわば、人間の意志にさらかって人間を反対の方向に駆りたてることがあり、人間の動物性、社会的な欲望を克服し、人間を動物者もしくは「アウトサイダー」に押し下げる可能性がある」と。この言葉を一度吟味していく必要がある。

今、僕は「適応的逸脱と同調的不適応」(小関三平)の問題と関連させていくと、C・ウィルソンの言う「アウトサイダー」とは、現代社会のテーマエ論者(倫理的信念論者)から見た不適応者こそ「進化の新しい局面」(「アウトサイダーを超えて」)を切り拓くのであるということ。

く状況とパーソナリティの世界——世界及び人生の解釈・評価・意義づけの総体——に関わる現実を分析していくことから出発する。よく実践的理論・理論的実践と言われるが、それよりもむしろ現実の分析から認識し、それから現実の問題に對峙していくこととするのが実践であり、認識の上位概念として、又、それらを含む全体概念として、把握し直さねばならぬだろう。

そのような実践を求めていく中で、僕等は各自の生活し続ける重みでもって、痛みでもって、「自己課外の克服」の第一歩を踏み出していかうとする姿勢になりうるのではないだろうか、という仮説的結論もつてこの拙文を脱稿することにした。

社会学部・四回生
() ぞわしんいち



映 評

“チャップリン体験”

■独裁者 大坪信善

チャップリン体験

七顔八倒というか、抱腹絶倒というか、映画館の闇の中で、笑いころげながら目頭が熱くなったのは、この映画が初めてであった。私はこれを「チャップリン体験」と名付けることにした。「ピートルズ体験」なるものが、私の青春の途上において、音楽への覚醒、芸術への覚醒を体験し得たし、ジョン・レノンによって、音楽(ロック)と政治(プロテスト)の構造を垣間見ることができたが、今回のチャップリンの映画によって、キネマの政治性を認識するに至った。

政治映画として

この映画は最高の芸術作品であり、喜劇王チャップリンが、監督・脚本・主演したモニュメンタルな作品である。政治映画という、プロパガンダとしての宣伝映画にとられがちである。例えば、最近上映された邦画では、「人間革命」(前橋幸会を築きあげた戸田誠聖)、「山口組三代目」

(田岡一雄の自伝)など、前者と後者では作品の質的性格は違うにしても、共通して宣伝色がでていることは否めない。むしろ政治映画というのは、「私は好奇心の強い女」(スウェーデン映画)があてはまるように思う。ある女子学生が、セックスと政治を同じレベルでとらえ、双方に同質の好奇心を示すという発想の構成でもって、スウェーデン社会の批判やフランコ独裁政権批判をインヴェュー・ドキユメンタリー形式で撮っている。話題になったのはポルノ映画としてであったが、この映画と「独裁者」とでは、前者がポルノ、後者は喜劇という形式的違いはあっても、内容において高度の政治性を打ち出していることに共通性がある。巷に氾濫している俗っぽい反戦映画などと違い、両方とも哲学的である。政治的でありながら、人間の幸福とか、愛、という普遍的なテーマをもつまでに作品の芸術性が高められている。

20世紀の英雄・チャップリン

この映画はファシズムにプロテストした映画である。一九三八年にこの映画を企画(この年ドイツ・オーストリア併合・ミュンヘン協定調印)、翌三九年九月に製作に着手

(ヒットラーはポランドに侵入)したという事実からして、世界映画作家中、唯一人ヒットラー生存中に噛みついたことの勇氣は、チャップリンが、一界の芸人でないことを示している。彼はこれまでの政治的という偽善から抜け出て、本当の意味での民衆的な政治人間になることによつてプロテストしたのである。すでに一世代分の時間が過ぎた現在、この映画を見て感銘を受けるのは、危機の時代の場合に果敢に戦ったチャップリンの姿勢がスクリーンに生き生きと描き出されているからに他ならない。

ヒットラーと同時代人

チャップリンは一八八九年四月一六日生まれ、ヒットラーは同年同月(二〇)日生まれだから、皮肉なものである。この映画でチャップリンは、ユダヤ人の床屋と独裁者のアドノイド・ヒンケルの二役を演じているが、このアイデアは、ロンドンファイルムのアレキサンダー・コルダーがチャップリンに「あなたの顔はヒットラーに似ているから二役でやっごらな」といったことからだそう。顔まで似ているなら、もちろん眼は違うと思う。チャップリンの眼はやさしく、ヒットラーのそれは殺気を帯びている。映画

のストーリーでは「ヒンケルとユダヤ人の床屋が似ているのは全くの偶然である」としているが、これは偶然ではなく、チャップリンとヒットラーが似ていたことは偶然であったが、チャップリンが自分の歴史的運命に対して本当に正直なものを出すことからして、ヒンケルと床屋が似ていたことにした設定は必然であったと思える。

ビエロ・ヒットラー

彼はヒットラーの出てくるニュース映画を繰り返し見て研究しているうちに、ヒットラーは、英雄でも天才でもなく、気の小さなノイローゼ患者にすぎないことを看破した。分裂病的な心理状態・喜怒哀楽の激変・二重人格の発作など、ヒンケルは見事にヒットラーをスクリーンに描き出している。中でも腫を異様に輝かせて、大きな風船地球儀を弄びながら踊るシーンは、チャップリンの卓抜したパントマイム芸術の見せ場があるが、このシーンはど独裁者の心理を見事に表現した場面はない。ゲッベルスらしき人物を登場させ、ナチズムの宣伝政策を巧みに見抜いた場面がないがあるが、なぜ当時、このチャップリンの映画を見て大衆はナチスの暴挙に気づかなかったのであろうか。最も、

よって、「偉大な物語」の「盛り上げられた正念場に於て俳優の眼光を通し、二〇〇万の観衆」に訴える「力強い光景」を表現した。チャップリンがカメラを正視しながらやったことは、「二〇〇万の観客の懐伏を求める」ことではなく、一〇〇万の観客にやさしい愛と勇氣を求めることであった。

チャップリンはかく語りき

ラストの六分間の大演説にチャップリンはすべてを賭けていた。

「私は皇帝になりたくない。支配したくない。できれば援助したい。ユダヤ人も黒人も白人も人類はお互に助け合うべきである。他人の幸福を念願として。お互に憎しみ合ったりしてはならない。世界には全人類を養う富がある。人生とは美しくあってほしいものなのに、私たちは、そうした生き方を失くしてしまった。貪欲が人類を毒し、憎悪をもたらし悲劇と流血を招いた。スピードも意志を通さず、機械は貧富の差をつくり、知識を得て人類は懐疑的になった。思想だけがあって感情がなく、人間性が失われた。知識より思いやりが必要である。思いやりがないと暴力だけ

ヒットラーの「わが闘争」が出版されて、これからこういう方法で大衆を騙すぞと、手のうちを見せられてくれたにもかかわらず大衆が騙された歴史的事実が存在することは確かだ。現在の韓国でこの映画を上映したら反響はどうであろう、興味深い。

チャップリンは映画で戦ったのであるが、ヒットラーの方が残念ながら、あの当時において勝ったのだ。映像を史上最初にかも巧妙に、徹底的に利用した政治家はヒットラーだった。ニュールンベルクはじめ、ベルリン、ミンヘンなどいたるところで彼が、演出した壮大な儀式（一九三六年のベルリンオリンピックもその一つであるが）は、また映像としての大衆的影響力をもったのである。同時代人としてチャップリンとヒットラーの共通した、映像の持つ政治的ポルテージの認識はおもしろい。

愛と勇氣を求める正視

眼は一般世間においても心の窓と呼ばれている。人間の個性を表象するばかりでなく、人間の生命の一刻一刻の気分転換変化をも映し出しているものである。「独裁者」のラストシーンでチャップリンはまさに「カメラの正視」に残る。航空機とラジオは我々を接近させ、人類の良心に呼びかけて世界を一つにする力がある。私の声は全世界に伝わり、失意の人々にも届いている。人々は罪なくして苦しんでいる。人々よ失望してはならない。……独裁者は死に絶える。大衆は再び権力を取り戻し、自由は決して失われぬ。諸君は機械ではない。人間だ。心に愛を抱いている。独裁者を排して自由の為に戦え。諸君の力を民主主義に結集しよう。演説は更に盛り上がり、胸にしみ込んでゆく。「世界を解放するために、困窮を取り除き、貪欲や憎悪や不寛容を捨て去るために戦おう。私達みんなの幸福の為に」

私はチャップリンの演説を聞いて、ストレートにぶつてくる言葉の迫真性に感動すると同時に、愛情あるコミュニケーションの必要性を痛切に感じた。ドタ靴をひききつた永遠の放浪者、チャペリーの愛情と勇氣に感謝したい。画面はゆっくりフィードアウトし、観客の静かな溜息の流れる中をチャップリンは消えていった。

（評者は社会学部四回生）
おおつば のぶよし

堀 康 三

はじめに

戦後日本企業と戦前の日本企業にはた
らく寡占資本化の論理は共通して変わ
りはないけれども、産業構造の委縮に伴
って、戦後日本企業にも体質の転換がみ
られる。

日本寡占資本による帝国主義論を戦前
から一貫して主張する者から構造改革論
者をよく批判しても、戦後の日本寡占
資本の構造改革の実体を無視することは、
何人といえども許されないことである。
すなわち、資本の有機的構成が高度化し
生産過程が高度に迂回化した現代装置産
業は生産力拡大という宿命的な制約を受
けながら同時に、社会的公害に対する責
任という袋小路に陥っている。

また、戦後日本企業の各寡占資本の生
産手段の私有形態は戦前のそれとは変わ
りはないけれども、生産の迂回化の行き
づまりと同時に、生産力拡大のため、剩
余利潤の追求のためという至上命令のた

めに、労働者の潜在労働能力を開発せん
として労働者に生産手段を占有せしめ、
労働者に経営参加を進めている。

このような戦後日本企業の脱工業化と
労働者による生産手段の占有支配とい
う二つの特徴ある構造改革の実体は本論の
テーマである。八戦後日本企業の特許戦
略史概説を展開する間に明らかにされる
であろう。

なぜなら、企業者の行う特許戦略なる
ものは現代では労働者の占有支配し管理
する中核的な対象であり、情報化社会に
おけるにふさわしい情報戦略の一つであ
るからである。

I 序 説

本論は昭和三十九年四月より昭和四十六
年四月まで、N食品工業における特許管理
責任者として探求してきた企業内実践の
経験知識を基礎にして成るものである。

戦後日本企業の

わたしの
研究ノートから

N食品工業とは昭和三年に定期的な
全く新規な大新食品を開発して以来、食
品業界に新たな独立した市場を提供し、
昭和四〇年頃まで、殆んど一〇〇%に近
い高度成長率で順調に伸長してきた革新
企業である。

ところが、昭和四〇年頃から同業他社
が二〇〇社近くも乱立し、過当競争の結
果、利益率の伸びははぶり、創業者利得
も消失し、有力な同業他社四社と一年か
ら一年半ぐらいのライフ・サイクルの類
似した中小新製品開発競争にまき込まれ
ることになる。

このような寡占（オリゴポリ）状態の
下での中小新製品開発競争が昭和四十六
年の大新製品の企業化成功まで続くこと
なるわけだが、その間、企業化に失敗は
したけれども製品化に成功した昭和四二
年の中小新製品をはじめ、約六種から八種
の中小新製品の企業化を企画し、実践す
ることになる。

昭和四十六年に企業化に成功した大新製

品の開発期間は昭和四〇年頃の創業者利
潤消失の時から約七年間であり、その開
発に要した費用は約二億円である。
そして、翌、昭和四七年度の総売上高
において、すでに、その大新製品売上高
比率が三〇・五%に達する程の大成功を
収め、再び創業者利潤を獲得し、大巾な
利益率を回復するに至っている。

したがって、八戦後日本企業の特許戦
略史概説といっても、N食品工業から
みたそれであるといえるわけだが、同時
にまた、次のような二つの理由で、N食
品工業の事例に限れないことを論証した
い。

まず、第一の理由は、N食品工業の特
許戦略といっても、具体的には、わが国
では物質特許、特に食品工業では飲食物
・嗜好品特許が法的に認められていない
から、飲食物・嗜好品特許は不能である
ゆえに、より間接的な方法で飲食物・
嗜好品の製造方法の特許の型で権利
保全をするわけだが、N食品工業の研究

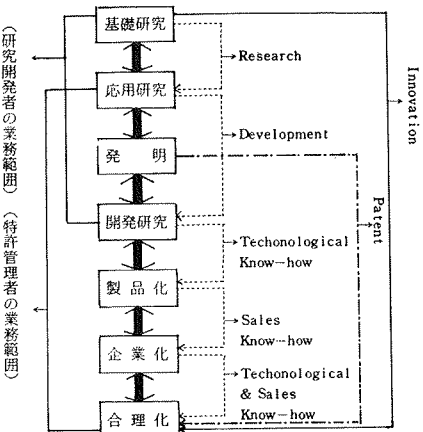
・技術者の対象領域といえども、これら飲食物・嗜好品の狭い領域に限られるわけではない。

そして、第一図に示すように、特許管理者の対象領域となると、研究・技術者

のそれとは比べものにならない程広くなる。

すなわち、特許・実用新案の産業分類表によれば、七部門、一三五類に類別され、同じ食品工業といつても、特許管

外的(経済的・政治的・文化的・環境的 etc) な諸要因



第1図 生産企業経営の諸段階と技術革新 (Innovation) 特許 (Patent) の概念図、及び研究・特許担当者の業務範囲図

理者の対象は、研究・技術者のそれと異なり、ほとんどその産業分類表の全分野にまたがっている。(第一表参照)

ここで、はつきりと区別しなければならぬのは、研究開発する科学・技術者の関連する産業分類と研究開発を側面的に援助し、いろいろな情報と研究成果を結びつけ企業化する特許管理者の関連する産業分類である。

前者の技術者の関連する産業分類はN食品工業という単一の企業の業務内容にかなり制限される。

この企業における技術者の関連する産業分類でさえも、大学関係または公官庁の関係の科学者・技術者からみれば、極めて広領域にわたっているものである。

しかし、後者の特許管理者が特許戦略上必要とする産業分類となると、企業における業務内容の枠をはるかに飛び越え、前者と比べれば、その数倍ないし数十倍の広域にわたたり、産業分類表のほとんど全分野に関連しなければならないのであ

第1表 特許・実用新案分類表

第1部門 (食品、飲料)		第2部門 (繊維、化学)		第3部門 (機械、電気)		第4部門 (石油、金属)		第5部門 (窯業、土石、建築)		第6部門 (運輸、電気)		第7部門 (鉱業、石油)	
1	11 食品中の糖質、澱粉	21	21 繊維中の糖質、澱粉	31	31 機械中の糖質、澱粉	41	41 石油中の糖質、澱粉	51	51 窯業中の糖質、澱粉	61	61 運輸中の糖質、澱粉	71	71 鉱業中の糖質、澱粉
2	12 食品中の蛋白質	22	22 繊維中の蛋白質	32	32 機械中の蛋白質	42	42 石油中の蛋白質	52	52 窯業中の蛋白質	62	62 運輸中の蛋白質	72	72 鉱業中の蛋白質
3	13 食品中の脂肪	23	23 繊維中の脂肪	33	33 機械中の脂肪	43	43 石油中の脂肪	53	53 窯業中の脂肪	63	63 運輸中の脂肪	73	73 鉱業中の脂肪
4	14 食品中の炭水化物	24	24 繊維中の炭水化物	34	34 機械中の炭水化物	44	44 石油中の炭水化物	54	54 窯業中の炭水化物	64	64 運輸中の炭水化物	74	74 鉱業中の炭水化物
5	15 食品中のビタミン	25	25 繊維中のビタミン	35	35 機械中のビタミン	45	45 石油中のビタミン	55	55 窯業中のビタミン	65	65 運輸中のビタミン	75	75 鉱業中のビタミン
6	16 食品中のミネラル	26	26 繊維中のミネラル	36	36 機械中のミネラル	46	46 石油中のミネラル	56	56 窯業中のミネラル	66	66 運輸中のミネラル	76	76 鉱業中のミネラル
7	17 食品中の色素	27	27 繊維中の色素	37	37 機械中の色素	47	47 石油中の色素	57	57 窯業中の色素	67	67 運輸中の色素	77	77 鉱業中の色素
8	18 食品中の香料	28	28 繊維中の香料	38	38 機械中の香料	48	48 石油中の香料	58	58 窯業中の香料	68	68 運輸中の香料	78	78 鉱業中の香料
9	19 食品中の防腐剤	29	29 繊維中の防腐剤	39	39 機械中の防腐剤	49	49 石油中の防腐剤	59	59 窯業中の防腐剤	69	69 運輸中の防腐剤	79	79 鉱業中の防腐剤
10	20 食品中の保存剤	30	30 繊維中の保存剤	40	40 機械中の保存剤	50	50 石油中の保存剤	60	60 窯業中の保存剤	70	70 運輸中の保存剤	80	80 鉱業中の保存剤
11	21 食品中の着色剤	31	31 繊維中の着色剤	41	41 機械中の着色剤	51	51 石油中の着色剤	61	61 窯業中の着色剤	71	71 運輸中の着色剤	81	81 鉱業中の着色剤
12	22 食品中の増粘剤	32	32 繊維中の増粘剤	42	42 機械中の増粘剤	52	52 石油中の増粘剤	62	62 窯業中の増粘剤	72	72 運輸中の増粘剤	82	82 鉱業中の増粘剤
13	23 食品中の乳化剤	33	33 繊維中の乳化剤	43	43 機械中の乳化剤	53	53 石油中の乳化剤	63	63 窯業中の乳化剤	73	73 運輸中の乳化剤	83	83 鉱業中の乳化剤
14	24 食品中の界面活性剤	34	34 繊維中の界面活性剤	44	44 機械中の界面活性剤	54	54 石油中の界面活性剤	64	64 窯業中の界面活性剤	74	74 運輸中の界面活性剤	84	84 鉱業中の界面活性剤
15	25 食品中の安定剤	35	35 繊維中の安定剤	45	45 機械中の安定剤	55	55 石油中の安定剤	65	65 窯業中の安定剤	75	75 運輸中の安定剤	85	85 鉱業中の安定剤
16	26 食品中の凝固剤	36	36 繊維中の凝固剤	46	46 機械中の凝固剤	56	56 石油中の凝固剤	66	66 窯業中の凝固剤	76	76 運輸中の凝固剤	86	86 鉱業中の凝固剤
17	27 食品中の膨脹剤	37	37 繊維中の膨脹剤	47	47 機械中の膨脹剤	57	57 石油中の膨脹剤	67	67 窯業中の膨脹剤	77	77 運輸中の膨脹剤	87	87 鉱業中の膨脹剤
18	28 食品中の結晶剤	38	38 繊維中の結晶剤	48	48 機械中の結晶剤	58	58 石油中の結晶剤	68	68 窯業中の結晶剤	78	78 運輸中の結晶剤	88	88 鉱業中の結晶剤
19	29 食品中の乾燥剤	39	39 繊維中の乾燥剤	49	49 機械中の乾燥剤	59	59 石油中の乾燥剤	69	69 窯業中の乾燥剤	79	79 運輸中の乾燥剤	89	89 鉱業中の乾燥剤
20	30 食品中の酸化防止剤	40	40 繊維中の酸化防止剤	50	50 機械中の酸化防止剤	60	60 石油中の酸化防止剤	70	70 窯業中の酸化防止剤	80	80 運輸中の酸化防止剤	90	90 鉱業中の酸化防止剤
21	31 食品中の殺菌剤	41	41 繊維中の殺菌剤	51	51 機械中の殺菌剤	61	61 石油中の殺菌剤	71	71 窯業中の殺菌剤	81	81 運輸中の殺菌剤	91	91 鉱業中の殺菌剤
22	32 食品中の発酵剤	42	42 繊維中の発酵剤	52	52 機械中の発酵剤	62	62 石油中の発酵剤	72	72 窯業中の発酵剤	82	82 運輸中の発酵剤	92	92 鉱業中の発酵剤
23	33 食品中の発色剤	43	43 繊維中の発色剤	53	53 機械中の発色剤	63	63 石油中の発色剤	73	73 窯業中の発色剤	83	83 運輸中の発色剤	93	93 鉱業中の発色剤
24	34 食品中の着色剤	44	44 繊維中の着色剤	54	54 機械中の着色剤	64	64 石油中の着色剤	74	74 窯業中の着色剤	84	84 運輸中の着色剤	94	94 鉱業中の着色剤
25	35 食品中の増粘剤	45	45 繊維中の増粘剤	55	55 機械中の増粘剤	65	65 石油中の増粘剤	75	75 窯業中の増粘剤	85	85 運輸中の増粘剤	95	95 鉱業中の増粘剤
26	36 食品中の乳化剤	46	46 繊維中の乳化剤	56	56 機械中の乳化剤	66	66 石油中の乳化剤	76	76 窯業中の乳化剤	86	86 運輸中の乳化剤	96	96 鉱業中の乳化剤
27	37 食品中の界面活性剤	47	47 繊維中の界面活性剤	57	57 機械中の界面活性剤	67	67 石油中の界面活性剤	77	77 窯業中の界面活性剤	87	87 運輸中の界面活性剤	97	97 鉱業中の界面活性剤
28	38 食品中の安定剤	48	48 繊維中の安定剤	58	58 機械中の安定剤	68	68 石油中の安定剤	78	78 窯業中の安定剤	88	88 運輸中の安定剤	98	98 鉱業中の安定剤
29	39 食品中の凝固剤	49	49 繊維中の凝固剤	59	59 機械中の凝固剤	69	69 石油中の凝固剤	79	79 窯業中の凝固剤	89	89 運輸中の凝固剤	99	99 鉱業中の凝固剤
30	40 食品中の膨脹剤	50	50 繊維中の膨脹剤	60	60 機械中の膨脹剤	70	70 石油中の膨脹剤	80	80 窯業中の膨脹剤	90	90 運輸中の膨脹剤		
31	41 食品中の結晶剤	61	61 繊維中の結晶剤	71	71 機械中の結晶剤	81	81 石油中の結晶剤	91	91 窯業中の結晶剤				
32	42 食品中の乾燥剤	71	71 繊維中の乾燥剤	81	81 機械中の乾燥剤	91	91 石油中の乾燥剤						
33	43 食品中の酸化防止剤	81	81 繊維中の酸化防止剤	91	91 機械中の酸化防止剤								
34	44 食品中の殺菌剤	91	91 繊維中の殺菌剤										
35	45 食品中の発酵剤												
36	46 食品中の発色剤												
37	47 食品中の着色剤												
38	48 食品中の増粘剤												
39	49 食品中の乳化剤												
40	50 食品中の界面活性剤												

②技術開発・研究開発そのものから自由であること。

③技術分野と同時に法律分野にも明るいこと。

④最終的に何よりも、人間社会のあらゆる動向・政治・経済・文化・国際間の動きに興味と関心をもつ普通人であること。

⑤企業のイノベーションを考える場合、技術的イノベーションよりも、営業的もしくは販売的イノベーションを重視する傾向のある営業センスのあることである。

次に、N食品工業の特許戦略が他の無数の戦後日本企業の特許戦略と本質的に共通した性格を有するものであることを確認した上で、なぜにN食品工業が戦後日本企業の代表的な革新企業の一つであり、その企業内実践の経験・知識を基礎として、論究すべきかという理由を補足したい。

冒頭で紹介したようにN食品工業が企

業化した新製品がわずかに一〇年間の間で一〇種にも及ぶということは、その研究開発段階でとまった商品が、その累積増あるということであり、アイデアの段階でとまった新製品は計り知れない程多数であることを意味する。(第四表参照)

N食品工業をこのように革新企業たらしめているのは、革新技術的要因、外的な金融・経済的要因、職務発明制度に結実する人材と組織との有機的な構成要因、環境的要素等々であるが、とりわけ、その研究開発費投資額について、他の食品工業一般、製造業、全産業と比較すればよりはまきります。(第五表参照)

そして、N食品工業のような中小企業に位置する段階にあった昭和三九年当時の企業にとって、研究開発投資による技術革新の影響が特に強く表われるものであるということも明らかになされた。

(注⑥)商品名(商標)「チキンラーメン」
(注⑦)「ラーメン戦争」と俗称されるよ

第五表 1社当り研究開発費 (単位:万円)

年度(昭和)	41	42	43	44	45	46	47
N食品工業 1)	2424	4196	5108	8493	18525	20473	25576
食品工業一般 2)	1057	1020	1357	1634	1622	-	-
製 造 業 2)	3070	3749	4086	5592	4553	-	-
全 産 業 2)	3129	3808	4199	5568	4672	-	-

(備考) 1) 昭和41年度・昭和42年度については人件費・備品及びテスト・プラント費・経費費を合計したものであり、昭和43年から47年度までは有価証券報告書から研究開発費として設備改善費立金・商品開発立金・海外市場開発立金・開発費・受入材料等をひらいて集計しさらに人件費として昭和41年から42年の人件費成長率2.3% (1953万円/1600万円)を加算し、合計したものであって、計算基礎は異なる。

2) 総理府・統計局「科学技術研究調査」昭和41年～昭和47年指により作成。

第六表 自社開発技術の研究開発規模

研究開発期間(待)研究開発費(種)	研究開発期間(待)研究開発費(種)										計	構成比(%)	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10			
未済	115	535	220	110	55	41	8	3	4	2	1	894	83.2
1~2未済	1	8	11	11	6	5	2	-	6	-	-	50	8.2
2~3未済	-	1	2	3	1	1	-	-	-	-	-	8	0.8
3 以上	-	1	2	2	1	1	-	-	-	-	1	8	0.8
計	116	345	235	128	63	48	10	3	10	2	2	980	100.0
構成比(%)	12.1	35.0	24.5	13.1	6.6	5.0	1.0	0.3	1.0	0.2	0.2	100.0	-

(備考) 1) 昭和32年度から36年度までの間に、企業化されたものうち研究開発費と研究開発期間の明示してあるもののみを集計した。

2) 技術動向調査資料より

第四表 発明から技術革新までの推定時間間隔

発 明	間隔(年)	発 明	間隔(年)
安全カミソリ	9	ジェット・エンジン	14
蛍 光 燈	79	L Pレコード	3
テレビジョン	22	磁気録音	5
無線電信機	8	透明合成樹脂	3
無線電話	8	ナイロン	11
三極真空管	7	綿花採取器	53
ラジオ(発振器)	8	防縮加工繊維	14
ジュニー紡織機	5	レーダー	13
水力紡織機	6	自動巻き時計	3
ミュール紡織機	4	シエル鑄造法	6
蒸気機関(ワット)	11	ストレプトマイシン	5
ボールペン	6	テリレン・ダクロン	12
D D T	3	チタン還元法	7
フレオン冷剤	1	ゼログラフィ	13
回転羅針儀	56	ジ ッ パ ー	27
脂肪硬化法	8		

資料出所) J. Enos, "Invention and Innovation in the Petroleum Refining Industry" The Rateand Direction of Inventive Activity (Princeton, 1962) PP. 307 ~ 308

(注⑧) 商標「カップ・スードル」
(注⑨) 商品名「インスタント・ラーメン」
うに中味を少々アレンジし、商標を交えては発売される新製品開発競争をいう。

(注⑥) 第六表からみれば比較的、高度であることがわかる。特に食品工業一般の研究開発費は製造業平均及び全産業平均の約三分の一であることからすれば、このN食品工業

第7表 最近5年間に開発した新製品の売上比率と業種

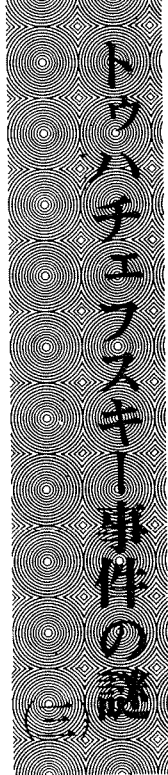
業種 売上比率	社数 合計	電電	産業	精密	航空	化学	金属	製	その他
		機子	機械	機械	機	工業	製品	紙	
11%未満	8	-	3	1	-	-	1	1	2
11~20%	3	-	-	-	1	2	1	-	-
21~30%	6	-	1	-	1	1	1	1	1
31~50%	4	2	1	-	-	-	-	-	-
50%以上	5	3	-	-	1	1	-	-	-
社数合計	26	5	5	1	3	4	3	2	3

(備考) 1) 野村総合研究所資料より

(注⑦) 昭和四七年度(昭和四七年四月一日より昭和四八年三月三十一日まで)の材料売上げを除く総売上高は一七二億六〇〇〇万円であり、經常利益三億七〇〇〇万円(前年比三八・一%増)、税引後利益一三億二〇〇〇万円(前年比三二・一%増)であり、売上高利益率は優に一〇%を超えている。なお、昭和四六年四月退社後の資料は有価証券報告書による。

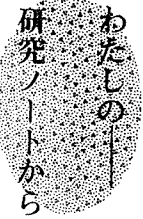
(注⑧) 昭和四七年度(昭和四七年四月一日より昭和四八年三月三十一日まで)の材料売上げを除く総売上高は一七二億六〇〇〇万円であり、經常利益三億七〇〇〇万円(前年比三八・一%増)、税引後利益一三億二〇〇〇万円(前年比三二・一%増)であり、売上高利益率は優に一〇%を超えている。なお、昭和四六年四月退社後の資料は有価証券報告書による。

(注⑨) 大学院社会学研究科、博士課程
はり ころぞろ



トウハチエフスキーマ事件の謎

平井友義



(I)

三六年八月の「合同本部除謀事件」裁判ののち、スターリンが東清ナカニズムの再検討を余儀なくされるような事態が持ち上ったらしい。「らしい」というのは今日まで、これを裏付ける確実な史料がないからであるが、一説によれば、三

六年九月始めに開催された党中央委員会総会ではプハリンに対する訴追を要求したイェジョフの動議が三分の二の多数で否決され、軍を代表する中央委員(ヤケール、ガマルニク)、同候補(ウホレーヴィッチ、トウハチエフスキーマ)のほか、イェゴロフ参謀総長、ブリュヘル特別極東軍司令官、プーリン政治総局長代理)は、スターリン派と目されていたウオロシロフ国防人民委員、ブジョンスイ騎兵監を除き、すべてこれに同調したといわれる(A・ウラロフ「スターリンの支配」一九五三年、ロンドン)。もっ

とも元ソ連共産党員であったウラロフ(本名A・アフトルハノフ)のこの情報は一概には信じがたく、問題の中央委員会九月総会の開催の真否についてはソ連側文献(たとえばソ連共産党機関紙「一九七一年、モスクワ」)には全然言及されていない。ただし、中央委員会のなかにスターリンの「個人崇拜」的風潮の行きすぎに対して抑止めをかける必要を感じていた者が多数いたらしいことは、すでに三四年一月の第一七回党大会のさい、スターリンを書記長の地位から解任しようとする動きがキーロフあたりを中心に

あったかのようなソ連側文献の示唆からも推察される(S・クラスニコフ「キーロフ」一九六四年、モスクワ)。

ともかく、フルシチョフが有名な第二〇回大会の秘密報告で明らかにしたように、三六年九月二五日、スターリンは保養先のソチから、「内務人民委員部はトロツキストレジゾヴィエフ・ブロンタの摘発について四年間の遅れをとっており、イエジコフ同志の内務人民委員への任命が絶対必要である」との電報を政治局に送り、九月三〇日には「血に飢えた小人」とおそれられたイエジコフがヤーゴタに代って粛清執行機関の最高責任者となった。こうして態勢を立て直したスターリンは、ひそかに次の犠牲者、赤軍首脳に対して綿密な追求の鋒先を向けていた。本連載の冒頭にかかげたゲンスタポとの接触もその一環であった。

三七年一月、ラデック、ピヤタコフらの「反ソ・トロツキスト並行本部陰謀事件」の公判で、ラデックは「一味」のプロト

ナの活動と関連してトクハチエフスキーの名前をあげ、検事(ウイシンスキー)の尋問に答えて、トクハチエフスキーと「並行本部」グループとのつながりをすくきっぱり否定していたが、「被告」の口からの忠告証明は決してトクハチエフスキーの名登になるものとは思われなかった。すでに前年一月にプリマコフが逮捕され、年が明けてから軍司令官クラスの人車異動があわただしく行われていたことは、軍部の閉鎖の分断という暗い予兆を意味していた。

大置強庄の第二の新しい波をとき放す契機は、三七年二月三日から三月五日までつづき、プハーリン、ルイコフの除名を決定した中央委員会総会であった。三月三日と五日の両日、スターリンは反ソ分子の徹底的根絶の必要をあらためて強調し、それを合理化するために、ソ連における社会主義の建設が成功すればする程、国内の階級闘争は激化し、今日ではトロツキズムは「労働者階級内の政治

時「潮流」ではなくなり、「外国スパイ機関に雇われてはたらく無原則、無思想な妨害者、謀略者、スパイ、殺者の徒党」のように理論の当否はあてて検討するとしても、これが機械的に適用される限り、「トロツキスト」の範囲は無限にふくらみ、しかも彼らに対しては「スパイ」に對すると同じ極刑しか残されていないということだけは明らかであった。スターリンの演説の全訳は「スターリン主義とアルパニア問題」一九六二年、合同出版社に掲載されている。同じ演説のなかでスターリンが、「戦闘での勝利をくつがえすには参謀部のなかの二三のスパイで充分である」と無気味な皮肉を飛ばしたのに呼応して、モロトフ(人民会議議長)は、「軍幹部の殺戮を直接煽動し、総会参加者を「人民の敵」に對する熱意の不足のことで叱責した」とされて

いる。
モロトフの発言は、ソ連でこれまで出

された党軍関係史では最も詳しく新事実も盛り沢山なユ・ペトロフ「ソビエト陸海軍における党建設」(一九六四年、モスクワ)に引用されているものであるが、その後の事態の進行について、同書は次のように述べる。中央委員会二一三月総会の直後から、内務人民委員部は、赤軍における「反革命的軍事ファシスト組織」という架空の組織に對する攻撃にとりかかった。六月一日から四日にかけての拡大軍事会議で、赤軍内の「陰謀組織」が討議の焦点となり、席上スターリンは「偽造の証拠」を援用して軍に巣くう「陰謀分子」とその影響を訴えたのであった。ここでいわれる「偽造の証



左からガマルニク、イエゴロフ、ブリュッヘルの名将軍
(ガマルニク以外ものち粛清)

拠となるものが、例のゲンスタポとの共同のデッチ上げ証拠そのものではないにしても、それと何らかの関係のあるものであったことは疑いない。この軍事会議(国防人民委員部の審議機関)がかつてのソ連邦革命軍事委員会に代るものにトクハチエフスキー以下の犠牲者は出席していなかったとみるのが妥当である。なぜならば、すでに捕をられていたプートナ、プリマコフに つづいて、コルカ(五月一日)、エイジエマン(五月二日)、トクハチエフスキー(五月六日)ウホレーヴィッチ(五月二九日)、ヤキール(五月三日)とつづき逮捕されてしまっていたからであ

る(ガマールニクは六月二日自殺)。このように五月に入ってから赤軍最高幹部が一網打尽に捕えられたことからみて、既述のようにゲシ・タボの「偽造証拠」が内務人民委員部の手を経てスターリンのところに届いたがおそらくとも五月始めであるとするれば、この証拠が少くともスターリンの弾圧計画の完成時期を決定するにあたって無視できない要因として作用したとみてよいであろう。

逮捕の実施と並行して宛の軍に対する政治的コントロールの確立をめざす思い切った措置が着々と進められた。まず二五年三月以来廃止されていたコミサール制の再導入をあげなければならない。これは三七年五月八日の中委員会決定によるもので、これより大隊以上の単位、中央機関の部局にコミサール、中隊には政治指導員がおかれることになり、少しあとは政治部担当副指揮官がコミサールとして指揮官と同等の地位を占め、二五年以来の単独指揮官制は中止された。



ヤーコフ

庄の動機としては、国内的要因と対外政策的要因が考えられよう。もちろん、この二つの側面は密接に結びついたものがあり、いわばメダルの裏表の關係にあるものであるが、分析的にはこれらを區別して考えるのが妥当である。まず前者については、肅清の起動因、あるいはダイナミズムからみると、すでにふれたよう

いま一つの改革は、軍、軍管区、艦隊における軍事会議の設置である。これも同じ中央委員会決定によるものであるが、いわば戦略段階での政治的コントロールをめざしたものである。五月一日の中央委員会決定では指揮官、軍管区政治部長、「上級政治指導員」の三名から構成されることになっていたが、七月にはさらに拡大されて州・地方委員会書記、および各民族共和国党中央委員会書記をもメンバーとすることになり、少しのうちに軍管区政治部長は「上級政治指導員」の単なる補佐に位置づけられた。ソ連側文献に出てくる「上級政治指導員」とは、内務人民委員部から派遣された日付役の別名であると西側研究者はみており、こうして軍事会議を通じて赤軍幹部のみならず、本来の「政治将校」の行動の自由もまた大幅に奪われることになった。

トゥハチェフスキーら赤軍将星の裁判や処刑の実状については全く知られることがないが、犠牲者の多くが、彼らに對

する「陰謀」について最後までスターリンの潔白と誠意を信じてまうと努力したことだけを指摘しておこう。たとえばヤキールは、死の前夜、「……私は驚って誠実であり、あなたと党と国家に對する愛情の言葉をいだいて、共產主義の勝利に對する無限の信念をいだいて死んでゆきます」とスターリンに手紙を書いたがこの手紙にスターリンは「卑劣漢、淫売」と書き込み、ヴォロシロフは「完全に正確な陰謀」と書き足し、モロトフも同様の署名を連ね、カガーヴィッチはさらに「裏切者、無賴漢……に死刑を」と書き添えていた(一九六一年一月二十七日付「プラウダ」)。このようなグロテスクな悲劇がなぜおこりえたのか。いよいよ結論に入ってきたようである。

(II)

スターリンの赤軍最高幹部に対する弾

針をめぐって、あるいはそのテンポすらをめぐって、さまざまな形での抵抗と障害を招来せずにはいなかったであろう。かかる状況に對して革命家として、鉄の規律を意志し、「国にムチをあてて(スターリン)ことをえらんだのは、それなりに賢明な選択であったことを私は承認する。しかし、この選択をえらぶことによってスターリンは逆に過去によって報復されざるをえなかった。

以後進的な歴史的条件のもとでの社会主義建設に不可避的に伴う動と反動の巨大なうねりに注目しなればならない。敵意に満ちた「資本主義の包囲」のもとで、農民の大海のただなかで最も先進的な近代工業のシステムと、それを支える自立的な人格の自由な結合を同時に創出するという前人未踏の大事業は、当然その方



イェジヨフ

ないということである。ここにスターリン体制の方法的苛烈さが始まる。「人民の自発性を信じていたら……」という反論が出されるかもしれない。しかし、あるソ連側の資料の言うように、一九三二年当時、年産九〇億ルーブリの能力をもつ機械工業が、実際にしか達しなかったというような現実（『党史の諸問題』誌、一九六九年八月号）を前にして、下からの自発性の喚起ではなく、上からの強制という方法に訴えることは、ピョートル大帝を生んだロシアの指導者にとって抗し難い誘惑であったであろう。この意味で私は、「大粛清」の基本的動因を既往の反対派と潜在的反対派に対するスターリンの偏執狂の憎悪にまず求めようとするR・タンカーの説には同意することとはできない（『大粛清裁判』一九六五年、ニューヨーク）。

しかし同時にスターリンは、大衆の自発性と創意を無視することによって、強

制と監視の網からはみ出したもの、あるいはそれからはみ出る可能性をもつものに、ソビエト体制に対する悪意と陰謀の匂いを探り出し、これを抑圧の対象にまき込んでゆくタンタロスの不安から逃れることもできなくなった。オールド・ポリンエヴィキ達への迫害は、かくして、独自の制度となりうる軍部に対する予防攻撃に発展せざるをえない。

軍が技術的中立性のタテ前にかくれて強大な物理的強制力のタンクになればなる程、この不安は増大してゆくからである。私はソ連における社会主義革命と、そこから生まれたスターリン体制の「不毛性」を云っているのでは

じて組するものではない。この点では、イタリア共産党政治理論誌「リナシッタ」（一九七三年二月三日号）におけるスターリンの歴史的评价をめぐる討論が大いに参考にできる邦訳は「世界政治資料」。

ところで、軍に対する予防攻撃が、ガマールニクの自殺やコミサリノフ制の復活に象徴されるように、軍に対する政治的コントロールの主張と並行して展開されたことはいま一度注目したい。ここには、単にスターリン書記長個人の影響力の確立というよりは、むしろ軍における党の影響力の低下をくいとめるというさし迫った要請が働いていた。そしてこの遠心的傾向は、戦闘II技術集団としての赤軍が急激な近代化と軍備革新の時期に逢着したとき、ある程度避けられないことでもあった。ソ連国防省機関誌「戦史雑誌」（一九六八年八月号）のある論文によれば、赤軍の軍備革新計画は五年計画と並行して進められ、たとえば戦車生産だけをとってみても、二八年六月

に確定された計画によれば五年後の目標は一〇七五万台であったが、その後工業化の進展に合せて修正され、二九年五月には最終目標は実に三五〇〇台に引き上げられた。戦車生産の分野が実質的にはゼロから出発しなければならなかったことを考えるならば、この数字がどんなに野心的であり、さらに戦車を使いこなすような要員の養成ということになると、どのような困難が待ちうけていたかは容易に想像されよう。しかし社会主義体制はこの至難事をなし遂げ、すでに三〇年モスクワ軍管区に実験的に最初の機械化部隊（「カリノフスキー機械化旅団」）が誕生していたのであった。このようにいわゆる五年計画の時期は、赤軍にとってはまず第一に近代技術・兵器の習得の時期であった。

三一年六月五日付中央委員会の決定「労働赤軍の指揮官及び政治家要員について」は次のように述べる。「中央委員会は、軍の戦闘力の一層の向上の問題における

基本的かつ現在決定的な任務は、指揮官要員の軍事技術知識の決定的向上、彼らによる戦闘技術と現代戦闘の複雑な諸形態の完全な習得であると考え、この任務の最も急速で成功裡の完遂に向けて、連邦革命軍事委員会、全指揮官要員および軍の完結組織はその主要な努力を集中すべきである。指揮官の軍事技術の完成はすべての指揮官要員、すべての軍組織の活動の最も重要な環とみなすべきである。こうして赤軍建設の重点は技術革新と「専門家」の養成におかれ、軍における政治部員と党員の努力もこれを側面から強力に促進することとしばられた。三五年末、赤軍で生まれた「スタハノフ運動」（1）は、それよりよりもはるかに高い障害物を乗り越え、はるかに長い距離を踏破した。戦車兵の記録に由来するものであった。それは象徴的である（ユ・コラブレフ他「ソ連共産党とソ連武装兵力の建設」一九五九年、モスクワ）。このような状況のもとでは、軍に対するさまざま

まの特典の付与と相俟って、軍における党の影響力の低下をもたらした。事実政治総局長ガムールニクは軍事的効率のために政治教育を若干犠牲にすることもやむをえずと考えるに至ったとみられるのである。したがって近代化のさなかにある赤軍の指導者にとって、兵士の主要な供給源である農村におけるドラステックな変革（集団化）と相つぐ党内の粛清は大きに攪乱要素となつたはずであり（少くともスターリンにとってはそう解釈され）、そこにスターリンが党の權威の再確立をめざして行動を決意する原因があつた。三六年一〇月、「參謀本部軍事大學生」が新設されたことは、赤軍旧幹部に代るスターリン親衛隊の幹部の育成にふみ切つたことを意味している。

スターリンはヒトラーとの妥協により時をかせぐ道をえらび、そこで政策転換のさいに妨害が予想される勢力をあらかじめ抹殺したのだと説明している。彼の見方で興味深い点は、ソ連における粛清が特に熾烈化するのは三七年一月ないし二月以降であるが、このころソ連のスペイン内戦への軍事介入が、フランス側を支持する独伊のエネルギーをスペインに釘付するだけの規模のものに減少したと指摘し、スターリンが全世界の左翼と良心の自由主義者の熱望したスペインにおける共和制の勝利を自らの権力装置の崩壊としておそれただとしておそれただとある（「レーニン、スターリンと西方世界」（川端他訳）一九七〇年、未訳社）。

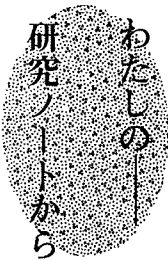
たしかにスターリンの対外政策決定におけるスペイン内戦の占める意義は否定できないにしても、これを粛清と並べて対独接近のための布石とみなくてはいささか無理がある。もしそうだとすれば、三七年二月以前と以後で粛清の動機はなり

性格に大きな変化があつたといふわけにはならないが、ケナンの論証は説得的ではない。粛清の論証はすでに述べたように一貫しており、軍部の場合も含めて後にはなればなる程、「予防攻撃」（先制攻撃ではない）の色彩が濃くなり、結局はスターリンのイメージにある「党」の權威の確立に帰着したというのが私の考えである。その限りに、私は粛清の起動力はあくまで内政にあり、対外的考慮は副次的加速的要素にすぎなかつたとみた。次稿では、トクハチエフスキー事件に始まる軍部に対する弾圧の全貌とソ連歴史叙述におけるその評価のあらましを紹介する予定である。

（法学部教授
ひらい ともよし）

日中文化関係史の一面

(XIV) 増田 渉



「海外新話」

前にあげたように、私の収集した幕末に出たアヘン戦争を讀物小説にしたものには「海外新話」、「海外新話拾遺」、「海外餘話」、「餘話」の片仮名がきを平仮名に改めて挿図を入れた「海外夷録」および「清喚近世談」があり、いずれも嘉永年間（改題本「夷録」だけは安政二年）に刊行されているが、「鴉片始末」が刊行を許されず、昭和になってはじめて印行されたように、これらのアヘン戦争の讀物小説も、その当時は大げらには出版できなかつたようだ。

これらのうち、最初に出版された「海

外新話」の著者が、官許を得ないで出版したカドで禁錮刑に処せられ、出獄後も江戸、京都、大阪での居住権を剥奪された（「三部構へ」ということが、やはり以後のものにも影響したかと思われる。「清喚近世談」はその表紙裏に「製本二百部限、禁販賣分同好」と刷られており、「海外新話拾遺」も表紙裏に「禁売買」と刷られている。

以上各書のうち、最初の「海外新話」について、その形体様式を説明して、この種の讀物小説の大体を知っておきたい。この他の諸書は、みな「新話」の形体様式に追随したものであるのだが、そして「新話」の著者・増田楓江（逸）の人となり、およびその処罰の事情につい

てもふれておきたい。

『海外新話』は、美濃版・五巻五冊で、最初の「例言」に「此編ノ記事、コレヲ『夷匪犯境録』ニ原ク。然レドモ『犯境録』ノ一書(ハ)、南北諸番ノ得士(ハ)奏議、策論及ビ戰闘聞(ハ)目撃ノ記、得ルニ從ヒ雜集シテ編リヲ為スノナリ。依テ年月時日ノ次序ニ至テハ、『侵犯事略』ニ拠リ、猶又繰

誤アルモノハ、他書ニ就テ改正ス」といつている。また『犯境録』ノ記載、道光二十年七月二日、夷夷(ハ)定海県ヲ攻陥スルノ事ニ始ル。依テ鴉片煙(ハ)流毒、及ビ林則徐(ガ)広東ニ於テ嚴酷ノ禁令ヲ設ク、終ニ夷人ノ侵犯ヲ招ク其ノ蓋纏ヲ知ルコトナシ。



『海外新話』より

今且ク「経世文編」「懲夷録」「浦島傳」「聖武記」等ノ諸書ニ拠テ変乱ノ縁由條件ヲ前ニ増載ス」と、その依拠し参考した諸書もあげている。ただし大いには、『犯境録』に記載する各地での戦闘報告、および同書のなかに見える挿話的な部分を採って、流物としての興味をもたせるようにしてある。

また「例言」に「行文ノ体裁ハ、盛衰記」「太平記」ナド、總テ皇國古來(ハ)軍籍中ノ套語ヲ用ユ。童蒙ノ士トイヘドモ、一読シテ記誦シ易カラシメテ可ナリ」というように、平易に面白く書かれていて、総ルビつきである。さらに読者の理解をたずけるため、巻首に「英吉利國紀略」があり、簡略ながらイギリスの地理、歴史、生産、貿易、学校、風俗、軍備(船艦、火砲)およびその侵略的政策にもふれ、最後に「防海ニ志アルノ士、西洋僻遠ノ夷人ヲ以テコレヲ蔑視スルコト無クシテ可ナリ」と結んでいる。次に「輿地略圖」「世界地圖」を掲げて、そのうちの英國所領各地を赤色で示している。その次には「清國略圖」を掲げ、「夷人侵犯ニ係ル」清國の府県名を朱点で示している。またその後には、「英特設裝圖」「歩卒軍裝前面」「同後面」の図、「英國大軍船圖」「英汽船圖」の絵があって、それから本文になる。鴉片煙流毒付黃禍茲上書事」から第一巻が

始まり、第五巻の最後は「兩軍和陸付和約條目」で終わるが、本文中にもところどころ見出し二頁の挿絵が入って、読者に興味をあかえるようになっていく。

「新話」以後に出たアヘン戦争を流物化した諸書は、すべてこのような「新話」のパターンを受けているがただ「拾遺」だけは木活字片仮名がきて、口絵や挿絵はない。この「拾遺」を平仮名がきにした「海外実録」は、やはり「新話」のパターンである。

『海外新話』の著者は禁銅刑

「海外新話」の著者・嶺田楓江は、学問所の許可を受けずに出版したというので処分を受けた。嶺田は、江戸町奉行・遠山左衛門尉から呼出しをうけて取調べられ、板木を焼捨てて絶版を申し付けられた。『新話』(禁銅)の刑に処せられた。この事件とその処分方について、西丸留

守居の簡井紀伊守と町奉行・遠山左衛門尉との間に交わされた往復書簡が、「開板指針」を引用して、宮武外骨の「筆禍史」(大正一五年、改訂増補「成光館」)に載せられている。この往復書簡を表面的に読む限りでは、学問所改めを受けたかったカドで罪になるといつているわけだが、簡井から遠山への返書のなかに、「此『海外新話』は全く『夷匪犯境録』を假名書に致し候迄の儀と申出候得ば、異教妄説を自己に著述候とは事替り候得共、前書一通りの物(前文に儒書、佛書、神書、医書、歌書をあげる)」とは相違の儀に付、此様の類は和漢共に書物体裁により開板相不成の儀等、篤と評議の上相定候儀にて、此書は開刻差留の方に相成候ものに候云々」とある。

者・嶺田右五郎(楓江)は押込の処分を受け、嘉永三年(一月)一件落類集」といへる写本にも本件の事を記し、其末に、これより後に判木師・熊五郎といへる者、此書を密かに重版発行して罪せられたりとの記事あれど云々」と確認している。この書の需要が少なかったことを裏書きするものであろう。

嶺田楓江(江川)

嶺田楓江については、五訂重訂(久文)の「事美文編」(明治四年、国書刊行会)第四に、重版條の「楓江嶺田翁壽碑銘」を収録していて、大たいの人物、経歴を知ることができる。また関儀一郎・同義直の「近世漢學者伝記者作大事典」(昭和一八年、井田書店)にも簡単な伝記と著作をあげている。(佐藤一斎とその門人「楓江遺文」を引用)。だが、

かなり詳しく、楓江の人物、事跡を伝えるものは楓江の門人・明石吉五郎著「嶺田楓江」(大正八年、発行者・千葉弥次馬)である。この書は、史料の考証・整理の点で十分とはいえないが、直接楓江を知る門人の著わしたものであるから(楓江の思い出話なども取り入れる)、その人柄や風貌をよく伝えているし、史料的にも中が広い。

宮武外骨は前述のように「押込の処分を受け一件落着き」と簡単に書いているが、明石吉五郎の「嶺田楓江」によると、「先生は獄に在ること二年であつたが、(中略)漸く嘉永四年の春に至り、赦されて再び青天白日の身となつたのである。併しながら、同時に所謂「三都構へ」を申付けられた。この三都構へなるものは、一種の予戒令であつて、凡そ幕府の政令に不平を抱き、其の行動馴かたりとも忌諱に觸るるものは、大抵この禍害に罹つたのである」といい、「明治一四、五年の頃、時の政府が自由民権を主

張する壮士を取締るがために、彼の東会条例や保安条例を施したるが如き者と同じである」としている。三都構へというのは、出獄と同時に、以後三箇年間は、江戸、京都、大阪の三地に限り居住権を剥奪する法令であつた。

挿画師まで投獄

これも「筆禍史」には書かれていないが、「嶺田楓江」の記すところでは、楓江の入獄とともに、楓江の依頼をうけて「海外新話」の挿絵をかけた画師も連坐して、同じように投獄されたという。そして画師は、終に獄中で死んだという。画師までが自分のために投獄された上、牢死したことについて、楓江はひどく心を痛めた。「後年に至り、先生に時折りこの話を聞かされたが、いつも門弟はこれがために皆、潸然として涙、襟を湿し

著者は語っている。
今日からみると、全く想像もできない苗裔な処罰だといえる。イギリスと清国との間に起つた戦争で、日本の一庶民、挿絵画師まで、とんだ災難を蒙つたわけだが、しかしこのような事實は、一面またアヘン戦争に対する幕府の並々ならぬ緊張感というか、警戒心を物語っているといえよう。

さて楓江は三都構へで江戸をはなれ、房総に行つて、ここに居を定めた。以来、彼は、房総の各地で育英の事業に従い、同地方の人々から景仰され、明治一六年に六七才で千葉県夷隅郡に歿した。「嶺田楓江」の著者・明石吉五郎も、この間に楓江から教えをうけた一人であり、その「嶺田楓江」も、主として教育者としての楓江の人格、事跡を顕彰するために著わされたものである。

「蕪海の志」から

嶺田氏は、代々丹後田辺藩主・牧野氏の家臣であつたが、楓江は父・矩俊の次男で、父が江戸詰めするとき、藩邸で生まれた。つまり彼は、武士であつたために、このような治安条例にひつかつたのかも知れない。楓江自身が書きのこした経歴書に、

「嘉永二(己酉)後二月「海外新話」著述上木之儀ニ付、御町奉行、遠山左衛門尉様ヨリ御尋之趣有之御呼出相成、取調中親許エ御預ニ相成申候
同三戌年一〇月二日右一条ニ付、御老中戸田山城守様御達ニテ押込被仰付
同四亥年正月一三日押込御免被仰付
同年四月一三日先年退身後、兎角身持放藩不相改、依之久離願(首従、親子の縁を切る願、勘当願)差出候処御許容有
安政一卯年正月一八日心底相改候ニ付、久離差許一(「嶺田楓江」に引用)

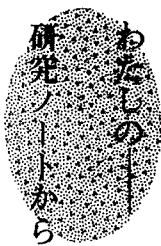


「海外新話」より

空間構造の差別 (VI)

末吉栄三

「コンビナートによる 生活環境破壊」(1)



このところ石油化学コンビナートの1爆発・炎上事故が目まぐるしいほどに続発している。それぞれの事故のいくらか詳しい事実は参考までにあげた表の日付の新聞を図書館にでもいって読んでもらえばよい。ゼネ石や興亜石油大阪、大阪石油化学など、堺・泉北コンビナート関係の事故に関しては地元のことであるから知っている人も多いはずだ。当然の事だが今年の石油化学コンビナートの事

故はこの表にあげられているものですが、ただという訳ではない。毎日の新聞だけでも少し注意して読めばコンビナートの事故がいかに数多いかはすぐわかる。「通産省調べ」には出てこないだけである。さらに「コンビナート」を形成していない化学工場がこれまた無数にあり、その爆発災害も数えあげればいくらかでも出てくる。今年(七三年)の一月二〇日に起った此花区の東亜ベナント工場爆発・大火災は、工場周辺の約一キロメートル四方にわたって人家などの窓ガラスが破壊され、人々を恐怖につきおとした。爆発音は数キロメートルの遠くまで鳴りひびいた。これなどコンビナート以外の化学工場による災害例である。「窓ガラスが割れた」と簡単にいうが想像もしてみることがいい。巨大な爆発音とともに噴きあがる炎と黒煙。建物や器材の焼える音。走り廻る消防車のサイレン。続いて二回目の大爆発の轟音とその衝撃波による家屋建具のはげしい振動。飛び散るガラスー

とある。三部構へて、久羅願を出したのであろうが、それが差許された後、彼は再び田辺藩に仕え、軍事改革の取組に役になっている。軍事といえは、当時は「海防」が主であったことはいうまでもない。楓江がかねてこの方面に相当な心得をもっていたからである。

小野湖山の「楓江漁長嶺田萬小伝」を「嶺田楓江」に引用しているが、その中に「士徳(楓江の字)は早成に鎗剣を學び、兵法を講ず、(中略)既にして慨然と籌海(海防)の志あり、大砲巨艦の製、攻守利害の説、ほぼよくこれを講明す、則ちまた蘭學者流に類す」(原漢文)

といっている。楓江は、はじめ佐藤一斎の門に学び、後また林復斎(名は棟、大学頭で後に米使ベリール來航のとき、幕府を代表してベリールと外交接衝す)に学び、復斎の代講も勤めて、屢々講塾料として諸大名から金封を給与されたという

から(「嶺田楓江」にいう、楓江の談話、相当な漢學者であった。漢詩は梁川星巖に学んで、大沼枕山、小野湖山、遠山雪如と並んで「星門の四傑」といわれたというから(「嶺田楓江」にいう、星巖はじめ右の人たちが楓江に和し、あるいは楓江に与えた詩が多く引用されている)、漢詩人としても相当の人であったといえよう。だが天保一〇年一月から同二二年二月までの三年間、箕作元甫に就いて蘭学を研究したというから(「嶺田楓江」による)、このとき既に「籌海の志あり」、海外事情にもかなり通じていたであろう。そして楓江が「犯境録」を平易に、軍談ふうに書きかえて「海外新話」を著わしたのは、つまりは「籌海の志」に発する啓蒙のためであったと考えられる。「新話」の巻頭に長詩を載せ、清國の敗戦をわが前途とすべしといっていることでもそれは察しられる。「天、前鑑を賜うは意なきに非ず、憂心事を記す、亦た微衷、嗚呼海國の要務は彼を知るに在り、予備、

厳整して待つあるを待むのみ」(原漢文)といっているが、あるいはこれが、人心に動搖を及ぼし、また幕府に対する一種の批判とも受けとられたのであろうか。

(文学部教授
ますだ わたる)

ことしの石油化学コンビナートの事故 (通産省調べ)

界	(30)	石油脱硫装置の故障で原料油が流出、炭上
倉	(4)	高圧ポリエチレン製造ポリマー押出機の故障でガスが噴出着火
徳	(7)	作業員のバルブ誤操作など三重ミスでアセチレン水塔からガスもれ爆発
高	(8)	灯油水素化脱硫装置の点検中、爆発
新	(26)	原油タンクに水が混入していたため異常反応を起こし破裂
高	(9)	ナフタ分解炉の空ぶきにより配管破裂
市	(10)	ポリプロピレン装置爆発、原因調査中
新	(13)	ポリエチレンプラントから出火、原因調査中
高	(17)	潤滑油製造装置から出火
川	(18)	合成ゴム原料のEMBプラント爆発、原因調査中(操作ミス)
川	(26)	ポリエチレンプラントから出火、原因調査中
川	(26)	軽油脱硫装置から出火
川	(26)	灯油脱硫塔から出火
新	(26)	塩化グラント反応塔爆発、周辺住民に直接被害

2. 普通の人なら恐怖でふるえるはずだ。このようにたび重なる大事故を起しているにもかかわらず、その当事者

も石油精製や石油化学に代表される工業

である、企業や通産省(政府)の基本的姿勢がそのような差別、差民政策として呼べないものであるならば、その地区の住民が自らの生命、生活を守ろうと思えば、住民一人一人が自らの意志によって、そのような企業、クニと闘う他には道はないはずである。そしていかにすればあのように歴大な権力、金力を備えた差別する者とタカエルのか。私はこの「研究ノート」から「を始める。一番最初にこう書いた。△それは本を読む事や机にすわって思考する事からは決して生まれぬ。その手がかりは、具体的な現場(地域)にのみ在る。私連自身がこれ以上差別され殺されたくないなら、差別者の手口・口ぶり等々を識り、そして何よりも、これまで差別され、負け続けてきたのは何故か? その「負け方」を、具体的な事実に拠つて学ばねばならない。さらにこうも書いた。△差別の空間構造」とはより平たく言えば、「いかなる手口で、いか様に負け、そして負けているのか」をその生活空間の面

は、取り扱うものがすべて可燃性物質であるばかりか、大量生産であり、操業も高温・高圧状態のものが多い傾向に多く、しかも種々条件の異なる状態の多くのタンク群に貯蔵され、それぞれ装置、タンク群の間を無数のパイプ類で接続している。しかも、石油化学は複雑な化学反応の連続であり、その反応自体も種々の圧力・温度のもとで行なわれている。さらに塩素、アンモニア、青酸などの有毒な物質も生成される。つまり、石油化学や石油精製に代表されるコンビナート系工業はそれ自体の中にヒト・ツマ・チカ・エバ、大事故に発展していく要因を無数にかかこんでいるといつてもよい。(「経済評論」七三年一〇月号で、町原信氏が八現在の化学工業においては、副次的な反応すなわち、「異常反応」は、常に避けられないと見るべき)だと指摘し、「本来起りえない」とか、「予断不可能」というコトバの欺瞞を明快に批判している。参照されたい。)それを当事者である企

業や通産省(政府)の連中が、知らないはずはないのである。彼等の発言の真意は、「バカな住民どもにムツカシイ化学装置のことなどわかりっこないから、適当な事を言っとけばいい」という気持と、それと表裏一体になった「周辺の住民や下請工の一人や二人殺しても何てことはない」という、強大な権力(暴力)を持った者の露骨なツケアガリである。だから、彼等の行なう「対策」も、災害や公害を本質的になくしていくことというのではなく、いつても肉実のない言葉だけでの「住民対策」であり、「世論対策」である。事故の原因をその本質的なところまで徹底して究明しつくす事ではなく、工場の新・増設にとって、住民の反発を招く公算が強くなるので、「まずい事になった」という認識しかない。このような発想が基本にある限り、決して事故は減少しないし、周辺の住民は常に災害と隣り合わせで日々の生活を営まざるを得なくなってしまう。企業と国

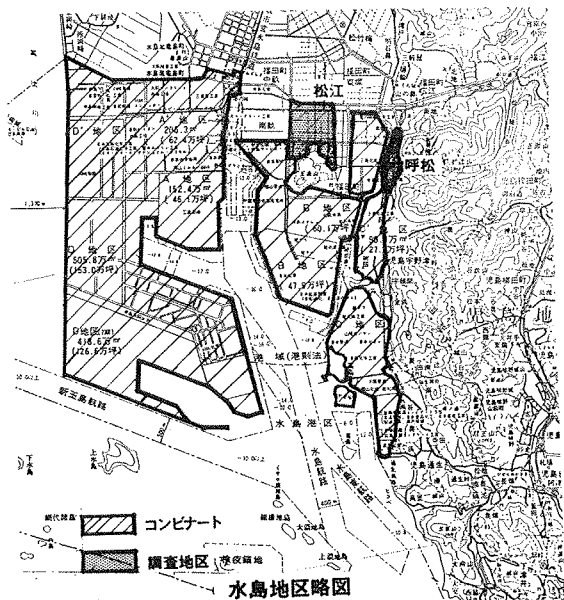
の基本的態度がそのような差別、差民政策として呼べないものであるならば、その地区の住民が自らの生命、生活を守ろうと思えば、住民一人一人が自らの意志によって、そのような企業、クニと闘う他には道はないはずである。そしていかにすればあのように歴大な権力、金力を備えた差別する者とタカエルののか。私はこの「研究ノート」から「を始める。一番最初にこう書いた。△それは本を読む事や机にすわって思考する事からは決して生まれぬ。その手がかりは、具体的な現場(地域)にのみ在る。私連自身がこれ以上差別され殺されたくないなら、差別者の手口・口ぶり等々を識り、そして何よりも、これまで差別され、負け続けてきたのは何故か? その「負け方」を、具体的な事実に拠つて学ばねばならない。さらにこうも書いた。△差別の空間構造」とはより平たく言えば、「いかなる手口で、いか様に負け、そして負けているのか」をその生活空間の面

から明らかにする事だ。一年半ほど前に書いたその文章は今書き直す部分があるとするれば、△それは本を読む事や机にすわって思考する事からは決して生まれぬ!と書いた箇所だけである。これは明らかに私の言いすぎであつた。タカエを開始するには、まず、これまで負けてきたワケを識る事。吉本はズバリ言い当てている。「敗北の構造」ノ3 ナートに隣接した嵯峨、松江を調査地区に選んだのは、「新産都市の優等生」とを宣きわたったこのコンビナートの実態を見きわめようとしたことではなかつた。もつと単純で確かな理由があつた。私連の中に、水島コンビナートの出現によって最大の被害を受けている呼松町に自宅を持つ者がいたからである。(因参照)かつて水島は広大な水田と蓮田を有し、さらに日本有数のイグサの産地であり、また、遠浅の海も豊かな漁場であつた。工場が入ってきたのは、昭和十八年

三菱重工の飛行機製造工場で、この跡地が戦後三菱に払い下げられ、三菱重工の自動車工場になった。現在見るような本格的コンビナートへの道を突き進み出したのは昭和四二年前後からで、それに最後の一押しを加えたのは三八年の、「岡山県南新産都市」の指定である。かくて昭和四二年一月現在においても、工業用地総面積四、二六五ヘクタール、立地決定面積二、五八六ヘクタール、鉄鋼・電力・石油化学を主軸とした巨大コンビナートが現出したのである。

「太陽の輝く、緑の木蔭の深い、空間にみちみちた理想郷」とナリモノ入りで誘導された「コンビナートへの道」の結果はどうであったか。人々の生活と居住空間はどう変わったか。悪臭——たまねぎの腐った臭い、卵の腐った臭いなどと言っても、このごろでは物はめつたに腐らないから、現場に行った事のない人達には何とも説明のしようもない。「すっぱい臭い」という感じはわかるだろうか。

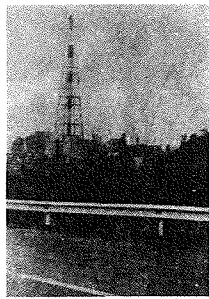
「アクシユ」というコトバは「イヤな臭い」「くさい臭い」という感じではない。頭痛がし、気分が悪くなり、食事がのどを通らない、といえは少しは実感がわくだろうか。悪臭の種類や強さは当然風の向きによって異なり、南→南西風の海風の時(つまり夏に多い風)に特にひどい。この地区の主風向も南→南西風である。夏の暑いさかりに悪さえ附けられない日が何日も続くのである。もともと窓を閉めただけで「悪臭」や「煤煙」が防げるわけではない。「喉がつかまる」「喉がいたい」「風邪をひきやすい」「風邪でもないのに、せきがとまらない」「目がいたむ」——「この数年來、喉の薬と目薬がよく売れるようになった」と複雑な気持ちをかくし切れない顔で語る薬局の主人。なんと多くの婦人が、自分の子供「一年中続く風邪」について語った事か。なんと多くの人々が工場騒音、悪臭、フレアスタックや各種の高い装置にまわりつくライトの光の為に眠れない夜を



すごしている事か。——悪臭も騒音も夜の方がひどい。人々が寝しすまった頃を計らって、工場がパワーをあげるからだ。これは常識になっている。

庭のバラは花をつけなくなったし、梅、イチジクも実らなくなった。山の木々も立ち枯れが目立つ。ある日、倉敷市は住民にこう言ってきた。「立ち枯れの原因は虫がついたからだ。自宅で木々が枯れそうになっている者で殺虫剤を必要とする者は、市がその費用の半額を負担しよう」——人は、その立っている場所が違ふと、どういう人格にもなり得るといふことか。これが、「里イモの葉にたまる水滴が黒くなつており、白い服で畑に入ると黒くなる」と語る人に向けて発せられる言葉なのである。

(七三年一月二日)



水島コンビナート
呼松の集落を通して
コンビナートを見る。

(工学部助手
すえよし えいぞう)

『教育の变革』

佐藤 忠男 著

著者のもつ教育における問題意識は、次のように要約される。

「教育において、教えようとする者の独善に抗して、学ぶ側の主体性を確立することが、いかに重大であり、いかなる方法によって、それが確立できるかということ」

この中に収められている論文の多くは、大学闘争、高校闘争が最も激しく行なわれた時期、そして、それが無残にも挫折した時期に書かれている。この時期は、「学ぶ者の主体性」という問題が鮮やかに浮き彫りにされた時期であり、我々にもその問題に、関心を呼び起こさせる。

教育の問題は、ただ単に学校教育という狭い範囲にとどまることはない。この本においても、「大衆文化と教育」という中で、いろいろなコミュニケーションが、「教育」という問題に結びついている、といっている。

我々も、学校教育だけに限らず、広い範囲において、教育を考えたしてみる必要があるのではないかと。

（『人間の権利』叢書3）
評論社・七九〇円

『ある女の回想——娘時代』

シモーヌ・ド・ボヴォワール 著
朝吹 登水子 訳

著者はバリの弁護士士の長女であり、従順な良家の淑女に彼女を育てようとする両親のもとで暮すうちに、人間としての自覚にめざめ、欺瞞に対する著しい拒絶反応を示すようになる。また、級友ザザや従兄ジャークへの愛を通じて宗教や階層等に対する自立よりその思想を確立させようとする。その時点でサルトルとの接触が彼女を大きく成長させる。

一般に回想や日記類には著者と読者との生活環境の相違による異和感が生じやすいが、この本の場合、ある種の共感的錯覚を感じさせる。それは著者がフランスの典型的中産階級家庭から脱出しようとしている点において我々現代人のセンスと何か呼応するものがあるからであろう。脱出（今までの自分を壊すこと）ができるかどうかということ、自己変革の最も激しい試練であり、思索の柔軟性という意味においても重要なことではないだろうか。それ故暗中模索を続ける人にとって、この本が何らかの指針を示す契機となればと思い、ここに掲げた次第である。

（紀國屋書店・五八〇円）

『立ちつくす思想——田川建三評論集』

田川 建三 著

前回の評論集「批判的主体の形成」では、平田清明批判を通して、近代資本主義社会におけるキリスト教の位置が次のように把握されていた。つまりキリスト教における地上的苦渋の末、永への観念的揚棄という信仰空間が、資本主義社会における「国家」と「市民社会」の分離へと横すべりしていった……。のみならず人間の精神構造に普遍的につきまとう宗教性「現実の矛盾を観念に於て揚棄する」を徹底的に批判することこそ、宗教批判＝観念批判の課題であるという視座が確立されていた。

本書に於ては以上の視座から吉本隆明の「マチウ書試論」に内在する問題を深く追究する（マチウ試論—関係の絶対性と観念の自立性）他、思想における観念性の批判の意義が様々な題材をとって展開されている。また一つの吉本隆明論としても非常に興味深い。吉本隆明が「マチウ書試論」から「共同幻想論」にかけて追究し続けてきた問題が、ここにおいて始めて正統に把握され、新しい展開をみたといつて誤りではないであろう。

△勸草書房・八〇〇△

『わたしの中のかれへ』

倉橋由美子 全エッセイ集

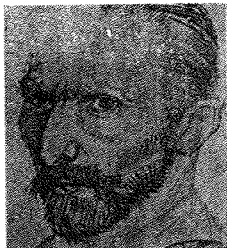
倉橋 由美子 著

一九六〇年から一九六九年の間に書かれたエッセイである。単純に言葉を用いて考え、広がりを持った場所を自由に散歩する、といった感じの本である。エッセイ集の為のエッセイではなく、その時々における倉橋の思想及び振舞いと思われざるも、何の気取りのもなく、「志」にもない書いている。倉橋ほど、言葉をあたかも玩具のように使い、書くという事を、何のひけ目もなく、単なる行動として行なっている作家もあまらう。このエッセイ集には、その面も強く押し出されているように思われる。しかも、この一見静謐そうに見えるのは反対に、（小説以外に見られる）内面性の追求と日常性への疑惑は、一〇年経過後にも不変であり、常に倉橋の中に躍まっている。日常的なものに対して、彼女の気取りのない言葉が、するどい輝きを示す。そして、カフカ、カミュを愛し続けている倉橋ならではの批判を併せて、我々の眼前に一見静謐そうな形体をとって、せまてくることは見のがせないのではないだろうか。

△講談社・六五〇△

読者の声

久野収講演記録を読んだ



ゴッポ「自画像」

の——を素通りして済ましていたかを知って情けなくなつたのである。と、同時に今から後戻りして考えていかねばならないと知つた。しかし、そうして振返つてみた時、非常に多くの問題提起が私の前に投げかけられていたのだ。何からうアプローチしていけば良いのか当惑してしまつた。

私など、何らかの形で教育者（この言葉はあまり好きではないが）になつたと思つていたが正直言つて自信を打ち砕かれた感じである。「教育者」とは最も頭の柔い、汚染（？）されてない脳を持ち主こそなる事を許される職業ではないか。一体、何人の人間がそれに相応した能力を備えているだろうか。今の教育には「洗脳」に近いものがなされていると言えないだろうか。「自己教育に目ざめること」は非常に大切だ。こうした後に本当の学問が可能になる。文部省の教科書検定などもっと問題にされるべきであろう。

狂う

今の世の中は、三無主義、情性、怠惰、悪徒類を教え上げればきりが無い程、人の個性を發揮しようとする場、否その現状に満足感を覚え、平凡という言葉をさも当たり前のように是認し合ひ、そのワケからはずれる事に難色を示す。色んな社会構造・制度も一応の影響を受けているにしても。

昔の日本人の一般的性格に、狭く深く、という言葉があり、今は、広く広く浅く、つまり外面的なものしりが増えつつあるし、世の回転の速さに一つのものに固執せず、良い意味あいの八方美人を生むのは当然の当然か。煩わしさの中に静を求めている。その一例に禪というものが見直され、沈思黙考しているような。

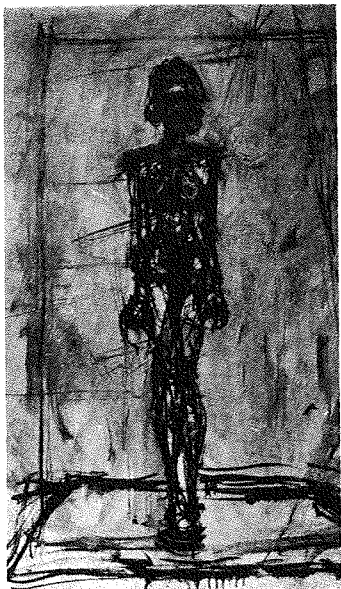
しかし現実の中で自分を思う時失望の感を強め、逃避に走る。自分の信念を持たない故、目標があやふやで、そのためその実行も中途半端で終り、また逃

避。この現象はどの世代にも共通の問題になつていく。

ここで提言、みんな狂おう。一発、厚い壁を割ってみよう。一つの事を徹底的に、計算なんてアセンス。特に若者にはバイタリティという、かけがえのない物もある。不言実行が今や有言有言。世

間に対する体裁と偽りの心を捨てれば。その時点において本当の心の接触が有り、もろに通じ合うものがある。それには最自分を問い詰めて、汝を知る事に止まるし、それを実行する事に意義という価値が生れうると信じる。

（文学部一回生 外 俊則）



アネット 一九六四

次号予定

(二三三号)一月発行)

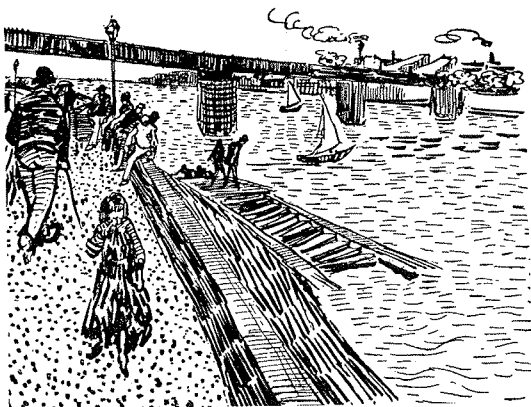
■ 書評

- △テレビの功罪
- △環境のテレビ考案
- △「大学・単位・教師」を通して

■ 特別寄稿

- △新聞——その流質と流連について
- △テレビ報道と視聴者の現実認識
- わたしの研究ノートから

- △トッハチエフスキー事件の謎(IV)
- △戦後日本の特許戦略概説(II)
- △日中文化関係史の一面(XXV)
- △差別の空間構造(VII)



ゴッホ「ローヌ川の鉄橋」

〈読者の声・イラスト〉募集

「書評」誌の内容を豊富にし、かつ読者と一体となる場をもち、読者からの縦横無尽な批判を受けつけ、また書評が一つの発表の場となるように「読者の声」への意見と「イラスト」を募集します。

一 読者の声

△原稿は四〇〇字詰原稿用紙の下二段を使用しない(二行が一八字以内)で、一枚三六〇字詰にして三枚以内(二〇〇〇字程度)にまとめて下さい。

△原稿は短くすることがあり、一切返却しません。

二 イラスト

△横(五cm)×縦(五cm)程度。

△一色(ペン書き)で独創的なものを。

△作品は原則として返却しません。

いずれも、採否に対する問合せには応じません。住所・氏名・所属・学籍番号・電話(匿名希望はその旨を)明記して下さい。

編集後記

★ キャンパスの木々もすっかり葉を落とし、吹きすさぶ木枯しの最中に立たずんでいきます。

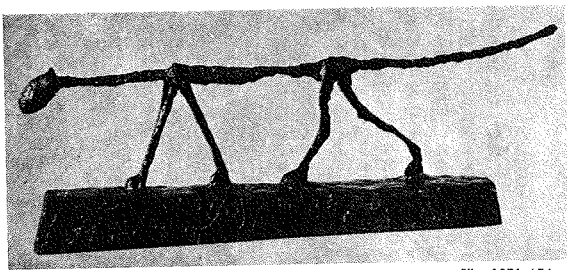
★ さて、本号のモチーフは「実存主義とその変化」とし、これにそって、六つの書評を依頼しました。

ここでは「羅針盤」でも述べているように「実存」を主体性を重視する自己規範の面から斬ろうとしましたが、いかんせん、こちらの問題意識の浅さ故に、六つの書評は、いわゆる哲学論や、著者への批判のみに陥っている感があるのは、遺憾なことです。

これをひとつの契機とし、真摯な態度でとりこんでいきたいと思えます。

★ また、レイ・アウトに関しても、いろいろと試行錯誤をくり返しており、大ききもB5版をA5版にかえ、表紙もかえましたが、これらについても、御意見をお寄せ下さい。

★ 尚、「書評」誌第三号(一月発行)では、モチーフを「環境と人間」とし、テレビ・新聞・学術等をとりあげ、人間性の追求を試みました。





編集・発行 関西大学生協同組合組織部「書評」編集委員会
大阪工業大学消費生活協同組合書務部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (TEL. 388-1121 内線776)